



TITLE:

3 京都新聞関係記事 (Ⅲ 資料)

AUTHOR(S):

CITATION:

3 京都新聞関係記事 (Ⅲ 資料). 京都大学における「学徒出陣」: 調査研究報告書 2006, 1: 191-230

ISSUE DATE:

2006-07-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/189604>

RIGHT:

3 京都新聞関係記事

1 海軍予備学生検査は順次に 通知なき者も心配させずに

一九四三年八月一日（朝刊）

海軍予備学生応募者は去る十七日の締切迄に二万突破、去る廿六日から東京方面で体格検査、口頭試問が実施されてゐるが、何分多数の応募者が一時に殺到したため、受験期日や受験場所が本人に通知されないため、熱心な応募者からの問合せが頻々とあるので、海軍当局はこれら一部の応募者の杞憂なきやう左の様な談話を発表した

さきに募集を締切つた海軍予備学生応募については、都合により東京方面の応募者のみ去る廿六日以来体格検査と口頭試問を行つてゐるが、時局に眼覚めた若人、学徒だけあつて体格は総じて優秀だつたことは邦家のため慶賀に堪へない、就ては今回の体格検査、口頭試問に呼ばれなかつた応募者は心配されてゐる向もあるやうだが残りの応募者については八月十日頃改めて試験を執行する予定である、地方における体格検査、口頭試問も亦予定通り八月上旬施行される^{ママ}訳である

2 征かん、大空の決戦場 陸軍見習士官を目指す 学徒らの身体検査始る

一九四三年八月三日（夕刊）

苛烈なる決戦下、皇国の興廢を賭する空の決戦に奮ひ起つ戦ふ学徒たちに開かれた陸軍特別操縦見習士官を目指す学徒の群は全国から馳せ参じ、しかもこれ

ら学徒たちの熱誠に應へ陸軍当局ではさきに締切期日七月卅一日を更に八月十日まで延期することになつたが京都師団管下においても新制度発表以来祖国愛に燃える大学高専学徒たちは校門からそのまま大空へ雄飛せんとする熱意を沸らせ幾多の美談を織込みつつ殺到、師団当局を感激させ立命館大学、予科、専門部を通じての六十名を筆頭に三重高農の四十名をはじめ予定数以上が早くも予想をされてゐるが、これらの第一次身体検査が三日朝から第一班京都陸軍病院で立命館学園の学生につき京都師団太田順一軍医少佐、第二班は京都陸軍病院で分院で京大、龍大、谷大、薬専の学生を〇〇分院大村節次郎大尉がそれぞれ検査医官となつて実施した、京都陸軍病院の第一班検査場では馳せ集つた志願者〇〇名は太田検査医官の注意と訓辞をきいて直に検査に入り、身長、体重、胸囲、視器、耳鼻咽喉並に厳密なる均衡機、関節運動などにつき次から次へと施行されたが、流石に戦ふ学徒の真骨頂を見せつつ日頃の訓練ぶりを遺憾なく示し、米英撃滅への烈々たる決意が場内にみなぎり亘つて関係官に満足を与へ好成績裡に第一日目を午後四時に終了した、なほ同検査は七日まで両院で続行される

この日午前九時京都師団兵務部長柏少将は第一班検査場に来り一時間半にわたつて熱心に状況を視察した

3 沸る熱血 “電報志願” 京都師団管下は六百十一名 学徒の陸軍志願けふ締切る

一九四三年八月一日（夕刊）

決戦の大空目指して勇奮する京都師団管下大学高専の学徒たちがさきに陸軍当局から発表された画期的な新制度——陸軍特別操縦見習士官^{ママ}への広き門を突破し、天晴れ陸軍となつて敵の野望を粉碎せんとした愛国の熱意は七月卅一日を

以て一応締切られ、その第一次検査は去る三日から七日にかけて京都陸軍病院、同〇〇分院その他で実施されたが、当局では志願洩れの愛国学徒たちに悔いを胎してはならぬと特に志願期間を延長のところ愈々十日を以て締切られた、しかもこの日早朝から電報を以て志願するものも続々あり正午現在にて遂に師団兵務部の予想を見事に突破し総計六百十一名を数へるに至つた、当局では更に近く行はるべき検査当日に出頭した学徒にも特に便宜を図ることになつてゐるが、師団兵務部発表による各出身校内訳は次の通りである（卒業者、卒業見込みの者を共に出身校内に含む）

臨済学院専門9、三重師16、高田専門2、福井師18、同志社専門27、同志社
高商22、三重高農46、絵専14、福知山高商5、京都武専6、京都薬専9、京
都高蚕14、立命高工26、大谷大17、龍谷大24、京都高工30、立命大74、京大
19、京都師29、滋賀師21、立命専門44、彦根高商7、福井高工4、同大29、
神宮皇学館大7、西山専門1、仏専1、宇部高工1、二松学舎専門1、早大
専門3、日本体専1、駒沢1、関西高工1、日大専1、大東亜文學院2、高
松高商1、金沢医大1、神戸高工1、福岡高商1、中央大2、関大8、日大
大阪専門4、拓大1、立正大1、横浜専門2、山口高商1、金沢医大附属薬
専1、大阪高工1、桐生高工1、山梨高工1、米沢高工1、金沢高工2、久
留米高工1、昭和 high 1、東洋大1、法政大10、日本大9、関学専門2、大阪
商大2、早大専門3、北大1、東京獣医1、神戸高商1、東大5、明大4、八
高1、東京高商1、立教大1、関学3、小樽高商1、東京薬専1、大阪外語1

4 学徒海鷲 素晴らしいぞこの体格 身体検査にどしどし通過

一九四三年八月一三日（夕刊）

メリケン学生どもの群雀叩きのめさずば止まじと、学問から大空の決戦へ——大

挙突撃せんとする大学、高専学生の海軍予備学生採用試験は去る十日から全国一斉に開始され、京都では京大学生集会所内健康診断所を検査場として連日続行されてゐるが、その三日目の十二日も前日に引続き受付番号順によつて逐次身体検査、口頭試問が行はれ、既に計〇〇〇名に上つてゐる

受験生はいづれも、海鷲志願の粒選り揃ひだけに厳格な身体検査も見事にどしどし通過して行く、なかには陸軍の現役兵から海鷲を目指した高専、大学出の〇〇部隊の勇士たち〇名が学生達に交つて陽灼けた顔を控室に見せてゐるなど流石に決戦下海鷲志願の真剣さと凄じさが鮮明にされてゐる

試験はなほ続行、合格者に対しては九月東京から通知されるが東京へは目下ほ電報志願が続々と提出されてゐる

試験官〇〇中佐

現在までの三日間のみの結果を見ても受験生はいづれも時局をよく認識し、米国の学生どもに對し非常に敵愾心に燃えてをり、士氣旺盛である、体格、態度共に大いによろしい、我々も力強く感じてゐる次第で電報志願をして來てゐるものもある

5 征け、学窓より空へ 京大 陸海軍航空隊入隊者の壮行式

一九四三年九月三日（朝刊）

米英撃滅へ！ヤンキー学生空軍の殲滅目指して大空の決戦に飛び立たんとする学生荒鷲は陸、海を問はず殺到、軍当局を感激させたが、このうち海鷲はすでに採用者を発表、陸の学鷲も近く決定を見ることになつてゐるので、京都帝大では、学内から力強く進發せんとしてゐる〇〇〇名の学徒荒鷲たちを送るべく一日午後三時半から法経第四教室で「陸海軍航空隊入隊者壮行式」を挙行した会場には羽田総長以下各学部長教授ら多数のほか、晴れて空の戦場に進まんと

する学徒や、これに続く決意にみづる後輩学徒ら参列、式は羽田総長の激励をかねた式辞について晴れの海鷲清水康夫君（経三）が必勝の信念を眉宇に烈々の答辞を行ひ、これに対して吉村敏夫君（法二）が、先輩の後に続いて荒鷲たるべきことを誓ふ壮行の辞を贈り全員「海ゆかば」を合唱して「出で立つ」ものの決意を昂揚した

6 角帽部隊出動 京大生ら薪の増産へ

一九四三年九月八日（朝刊）

爽涼の秋の訪れとともに京都市民へ一束でも多く温かい贈物を届けようと、薪炭伐採運搬の勤勞奉仕にドツと繰り出した、これは増産の秋に展開された戦ふ角帽部隊第一陣――

京大医学部報国隊員八十名は芝田生徒主事引率のもとに、七日朝丹波保津村を訪れ、文なす雑木を踏み分けて薪の伐採運搬に終日敢闘した、真っ白いシャツの袖から覗かせた逞しい腕は土に塗れ、玉なす汗は肌に烙きつけるが、密林に挑む学徒達の意気軒昂、汗の結晶は瞬く裡に薪の山を築き、角帽部隊に増産の凱歌が高らかに挙つた、尚八日も引続き同地で勤勞奉仕を行ふ

7 京大学徒の敢闘 薪の増産に必勝の力

一九四三年九月一〇日（夕刊）

府下船井郡下和知村森林組合では勞力関係から約一万束の薪が山中に眠つてゐるので何とかしてこれ運び出し一日も早く都会へ送りたいと種々苦心を重ねてゐるところこのほど府森林組合を通じて京都帝大報国隊の出動を得ることと

なり、隊員約一千名が去る五日から十日迄六日間に亘つて聖汁を流してゐるが、京大報国隊長田中秀央教官総指揮の下に先づ第一日は帝大附属医専学生八十五名が、約一千束を搬出、第二日目からは、文学部学生が、毎日約百名宛出動して炎天下五キロの山道を搬出に奮闘し、集積所には一日毎に薪の山が築かれ慣れぬ仕事にも大いに京大学徒の意気を發揮してゐる、なほ現場出張の府森林組合聯合会片山技手は

「帝大の学生にこれら馴れぬ作業は果してどれだけの成果を挙げ得るだらうかと思つてゐたが、やつて見て実に驚きました、この分だと予定数は遙に突破出来ること確實です」

と非常に喜んで居る

8 共栄圈背負ふ僕ら 京に張切る各国留日学生たち

一九四三年九月一二日（夕刊）

今までどちらかといふと混然としてゐた満洲、中華民国その他からの留日学生の選定、教育、生活輔導などの処遇方法が十日の閣議で政府自らこれに乗り出し、大東亜、文部両省の所管事項として明確に綜合統一したことは、政府が大東亜文教政策の重要な一環として皇国を中心とする大東亜共栄圈建設の指導的人材養成のためになされたものであつて、その効果は期して待つべきものがある、各国から来り学ぶ学生は大東亜戦以後新たに南方諸地域からの分も加はり、益々増加の一途を辿つてをり、これらの学生に本當の意味の日本を学ばせるためには殊更に特別学級を設けたりせず俱に学び、共に鍊成も勤勞もさせて皇国の素朴な姿にふれさせ、戦ふ皇国民のきびしい現実をも直視させて将来實質的に故国を指導するに足る人材に育て上げやうとするのである

学徒「京」にはいま、府警察部の調査によれば満洲国七十名、中華八十余名、泰一名、アフガニスタン一名、計百五十余名の若人たちが京大をはじめ龍大、谷大、同大、絵専などに学んでをり、その八割までは京大である、即ち京大には在籍学生として満洲四十四名、中華六十二名が各学部に進学、これに研究嘱託、選科、大学院学生を加へれば満洲五十六名、中華八十一名を数へてゐる、もつともこのうち満洲学生十名と中華学生廿三名が廿三日卒業して行くことになつてをり新入学生数は未だ確定してゐない、これらの留学生に対しては同大の学生課に専任主事及び嘱託を設置して輔導的役割を果してゐるほか、同大の課の佐々木嘱託を中心とした満洲国留日学生会館が田中閔田町清風荘の隣りにあつて学生たちの修養や交際のための俱樂部になつてゐる、また中華民国留學生のためには吉田にある学生寮が昭和十五年十二月開設以来、中川寮長を中心に家族的雰囲気の中に修養、知識交換座談会などのほか毎週土曜日夜には寮長から時事問題の解説などを聴き日本的知識の把握につとめてをり現在の在寮学生は十三名である、而してこれらの輔導機関に対しても統合とか設立認可制などによつてその効果増大が図られることになつてゐる

9 三万貫の大戦果 京大の学徒が草刈勤勞奉仕

一九四三年九月一九日（朝刊）

京大では、学徒の草刈勤勞奉仕として乙訓郡大枝村京都農林学校実習林で利鎌をふるふこととなり十八日その第一日を実施した、即ち午前八時新大阪西院駅に集合した五百五十名の学徒は勇躍現地に出動、五時間に亘り聖汗を流して約三万貫の戦果をあげ午後三時半引揚げたが、大枝村当局では各部落毎に翼壮班長、区長が責任者として指導に当り一人ずつ及び女子青年、婦人会幹部らも出動協力した

10 法文系大学の教育を停止す 高等科の義務制は当分の間延期 学校整備も 適当措置 学徒進軍篇

一九四三年九月二三日（朝刊）

文部省では国内態勢強化方策に基く教育動員態勢の確立について、鋭意具体策の決定を急ぎつつあるが、これが根本方針に関し廿二日左の当局談を発表した即ち原則として一般に徴集猶予を停止する、但し理、工、農、医系統は新たに「入営延期」の制度を設ける

一、理、工科系統の学校はさらに拡充整備する
一、法、文系の大学は教育を停止する

一、教育要員確保のために法、文、経系統と雖も、教員たるべき者は継続して勉学せしめる

一、十九年度より実施すべき国民学校高等科の義務制は当分の間延期する

一、国土防衛の見地から都市集中の学校、校舎の整備疎開について適当の措置を講ずる

等の諸点に亘るものであるが、要するに緊迫せる現下の情勢下に鑑み、国家総力の一環としての学校並に学徒に対する国家要請に基く応召を断行し、改めてその総力を国家の必要に基く各般の動員態勢に配置をなさしめると共に、決戦下における行学一体の本義に基く教育の刷新強化を期せんとするものである、特にこの際注意を要することは

(一) 徴集猶予は停止であつて廃止でないこと

(二) 法、文系統大学は教育を停止するのみで、これを廃止するものでないこと

の二点であるが、如上の学校応召に基く教育動員態勢の実施は、一部学校の整

理統合を結果的に必然ならしむる訳であるが、政府としては今回の措置により従来に比し教育を毫末も軽視するものでなくあくまで現実の要請に基く教育決戦態勢への発展的効率的発動態勢を整へんとするものである

文部当局談 昨日の閣議において「国内態勢強化方針策」の決定を見たのであるがその内教育に関係ある重要な点は概略左の通りである

一、一般適齢に達した学生の徴集猶予はこれを停止、理、工、医及び農科の所謂理工系統の学生については、国の要員養成の建前から新たに入営延期の制を設け勉学を継続せしむること

二、理、工、医、農等の所謂理工系統の学校は更に整備拡充を行ふとともに法、経、文等の大学においては将来教育者たるべき者等のための教育を除き、これを停止すること

三、教員の確保は教育上極めて重要なことであるから、その教育は継続すること

思ふに今回の措置は決戦下の今日ではあるが、国の動員計画と睨み合せ国家の所要の要員を養成するといふ意図に基くものである、従つてこれ迄学窓に就いて勉学を続けてゐた学徒も今こそ勇躍奮起、銃をとつて第一線に起つ秋が来たのである、故に国家要請に基いて学窓に残り、勉学を続ける者はまさに国家に徴用せられた者といふべきであつて、一層その勉学修養に精進努力することが第一の責務である

一、如上の処置により一部の教育は停止せられることとなるが、一方には国土防衛の全きを期する上からも、必要な程度に於ては学校校舎の整理疎開等の点をも考慮し、今後適当なる措置を講ぜねばならぬと考へる、尚学徒が服役より帰還したる場合に於ける復学に就いては、十分なる措置を講ずることとしたと思ふ

一、尚今回の措置によつて一部の教職員においては直接授業を担当することなきに至る者もある訳であるが、これ等は学問研究に、或は他の学校の教育そ

の他の要務にそれぞれ御奉公の道が存する次第であつて、本省としては適當なる方途を講ずる考へである、同時に学校教育全般に亘つて決戦下に対処すべき行学一体の本義に徹し教育内容の徹底的刷新と能率化を図り国防訓練の強化勤勞動員の一層積極的かつ徹底的なる実施等を併せて考へて置かねばならぬと思ふ、併して学徒勤勞については学徒として集团的に動員するやうに致したいと思ふ

一、尚昭和十九年度より実施のこととなつてゐた国民学校高等科の義務制は、諸般の情勢を考慮し、この際当分のうちこれが実施を延期することとした、青年学校については実情に即して戦力及び生産増強に資するやう刷新改善して行きたいと考へる

一、要するに今回の決戦下の教育に関する臨時措置は、戦ひ抜き又勝ち抜くための非常措置であつて、今夏職場勤勞に出動して天晴れの実績を示した学徒諸子は、いまこそ「み民われ」の自覺に徹し思ふ存分第一線に勇戦奮闘尽忠報国の誠を致すことが出来、その若き力は皇軍に一層の威力を加へることとなつたのであつて、このことは誠に諸子の本懐であり、又光榮これに過ぐるものはない、学校当事者並に父兄各員はもとより、広く一般国民各位におかれても以上の趣旨を十分諒せられ、この秋この際勇躍難に赴く若き学徒とともに、深く内外の諸情勢を察し必勝信念のもと、悠久なる皇国の将来といふかぎりなき大東亜戦争の意義に徹し相携へて政府の意図の貫徹に協力邁進せられん事を望んで已まない次第である

11 学徒も総てを捧げて

一九四三年九月二三日（朝刊）

政府は大東亜戦争を完勝するためそして皇国をして愈々必勝不敗の態勢を整へ

るべく、今回国政運営に関し画期的改革を断行する事となり、廿一日の閣議でその大綱を決定するとともに、東条首相は廿二日午後七時卅分からラジオを通じて別面所載の如く全国民に向ひ牢固たる決意と今後とらんとする革新的な措置について率直に闡明し全国民の一大奮起を促し徴兵猶予の停止、理工科学生のみの入営延期、法文科系統大学専門学校の整理統合を明かにした、これぞ帝国が不遜暴戾なる敵米英に勝つたためになにもまして肝要なところであり、今後我等はすべてを捧げて国家の要求するところに帰一せねばならぬのである、みたみわれ一億は「大いなる決意と尽忠報国の誠……」は完勝と同意語なることを今一度考へなほすべきである

羽田京大総長語る

文科系統の学生に対する徴兵猶予の停止は国家として緊急止むを得ざる処置として行はれることであるから、学校当局としてまた学生としては一途に国家の方針に則り、勇往邁進するのみである、殊に近來の科学兵器の急速な進歩は科学の知識の程度の高い兵士を必要とされてをり、まことに適当な処置であると考えられる、しかしながら文科系統の学生は極めて膨大な数に上り、したがって学校施設、教授等は非常な責である、また学生中には病弱その他の理由で軍務に適せぬものもあることであらうから、これ等に対する将来の方針を確立、かりそめにも我が国の歴史を建設する人、文科学の命脈をたやさぬやう当局の善処を要望する次第である

12 学術戦士、誉れの出陣 京大大学院初代特別研究生 皇国学徒烈々の決意

一九四三年九月三〇日（朝刊）

苛烈なる戦争の現段階に処し、科学動員の決戦態勢今ぞ成る……学徒の総力は剩す事なく国家が要請する緊急重要部面へ配置された、いま新制度による京大

大学院初代特別研究生に選ばれ、敵米英と鏖を削る科学戦へ晴れの出陣する若き学徒の一人、室井徳造君（二三）を京都左京区田中関田町の下宿先に訪へば、象牙の塔に残つて国土防衛の重責と敵米英を粉砕するまでは一步も譲れぬきびしい科学の決戦場に戦ひ抜かんとする皇国学徒の烈々たる決意を眉宇に漲らしながら次の如く語つた

「三回生の時から初めて潤滑油の研究実験と取組み、一応の基礎知識は積みましたが、この七月に就職の問題が出ましたとき恩師児玉信次郎先生から大学に踏み留まつたらどうかとのお話があり自分もこの研究に激しい意欲が動いてゐた際でもありましたので生涯を燃料化学の研究に捧げやうと決心し、大学院入学を志望しました、決戦下潤滑油の重要性は今更申すまでもありませんが、航空機のみならずあらゆる機械の摩擦面に注がれる大きな問題です、要するにガソリンにおけるオクタン価のやうに、温度に支配されても変らぬ粘度指数をもつた潤滑油を生み出すのが研究目標となるもので、賜へられたこの研究使命の重さと尊さを自覚するとき、この研究課題に終止符を打つまでは斃れても断じてやり抜く覚悟です」

13 在学徴集延期停止に伴ふ臨時徴兵検査を施行 入営延期者を除く 全員、三種も一斉入営

一九四三年一〇月二日（朝刊）

国内態勢強化方策に基づく決戦段階即応への大転換は現時局下喫緊の絶対的要請として目下内閣及び各省間においてこれが具体化を急いでゐるが陸軍では最近における全面的教育態勢の改変と相俟つて今回在学徴集延期を全廃することに方針を決定、去る廿八日の臨時閣議に兵役法第四十一条中四項の規定発動に基づく在学徴集延期臨時特例に関する勅令案を陸軍武官服役令中改正及び陸軍補充

兵令中改正の兩勅令案とともに提出正式に決定を見るに至つたので二日附官報をもつて公布即日これを施行した、即ち兵役法第四十一条第四項の発動は戦時又は事変に際し特に必要がある場合においては勅令の定むるところにより徴集延期せざることを得といふにある、軍は大東亜戦争必勝態勢の強化を期するために所要の幹部を補充する必要上この際学生の徴集延期を全面的に停止してその全員に対し徴兵検査を実施することとなつたのである、しかしこれにより満廿歳に達せる学生はもちろん現在在学中にして徴集を延期せられてゐる学生は全部当分の間在学の事由による徴集の延期を全然停止されることとなり今回在学徴集延期を停止せられたるものに対してはもつとも速かに陸軍及び海軍の幹部とするため来る十月廿五日より十一月五日迄の間において昭和十八年臨時徴兵検査が実施されることとなつた、しかし右の除外例として

一、理工科系統及び医科の者

一、農科の内で林学、農芸化学、農林科学^(七)または畜産関係の者

一、師範学校、高等師範学校等の者

一、其他満洲国の武官となるべき学校の生徒

等は延期をなし得ることとなつてゐるが医科、理工科系統の者は直ちにこれを入営せしめても技能上当該方面の軍幹部となし得ないので特に入営を延期し引き続き所要の課程を修学せしむることとし、また軍の幹部補充のため特に必要ある教育を継続するために普通教育の教員となるべき学校の学生生徒に対しても同様の処置が講ぜられたのである、右の入営延期者は従来徴集延期者とは異なり既に徴兵検査を受け随時軍に編入せられ得る状態におかれてゐるものをいふので軍としては必要の期に際し修学中といへどもこれを入営せしむることがあるのである、しかし今回実施せられることとなつた徴兵検査はその目的に鑑み従来の実施方法とは全くその觀念を新たにし法規の許す範囲において最大限に関係事務を簡易化しその処分を迅速に決定することにより軍の決戦的動員に万全を期する点に重点がおかれこれがため受検学生その他の関係者も特に積極

的な協力が要望されてゐる、しかしその特質とするところは

一、検査実施の迅速を期するため本籍地の役場にある本年の徴兵検査に関する徴集延期願の名簿に基き徴兵官において徴兵検査の日割を決定し本人の届出を待たずして徴兵検査受検日時を本人に通知すること、従つて身上の異動に関する届出をなし居らざるものにして万一徴兵検査開始時日までに何らの通知なき時は速かに本籍地の市町村役場に申出ることを要すること

一、徴兵検査を寄留地に施行するためには関係書類を本籍地と寄留地との間に復送せしめ時日を甚だしく延引するので全員本籍地の府県において実施することとなつたこと

などであるがこれにより従来の徴兵検査の施行上の障碍は除去、簡易化された訳である

次に入営については今回の臨時徴兵検査を受けた陸軍関係の壮丁全員は体格等位の甲種又は乙種^(八)のものは勿論丙種^(九)のものでも現に放出性結核、法定伝染病等のため召集不能のものは別として前記入営延期者以外のものは全部来る十二月一日を期して入営せしめ、海軍では追つて入団期日を指示することとなつた、かくして入営したもののは大部は約二ヶ月にして幹部候補生として採用せられさらに二箇月後試験を行ひ甲種幹部候補生となり入営後一年数箇月で将校となる、又海軍に入団するものは兵からも予備学生に採用する道が開かれる、なほ学生中朝鮮、台湾の同胞に対しては臨時に特別志願兵として採用が考慮されてゐる

14 教室は戦場だ 京大入学生、意気高く宣誓式

一九四三年一〇月二日(朝刊)

大東亜戦下二度目に迎へた京大入学生宣誓式は一日午前九時から同大学本部大

広間で挙行、一千八百七十名の新入学生を前にした羽田総長は苛烈なる決戦下、しかも徴兵猶予撤廃下における心構へとして「すべからく全学徒入営の心で教室を戦場と考へよ」と烈々の告辞を与へ、大学院学生代表河地貫一、学生代表鳥越正彦両君はこれに応へる宣誓を行ひ、戦ふ学園の入営にも比すべき宣誓式は同四十分厳肅に終了した

本年度の入学生は本科生千七百九十名、外国人は廿五名、選科生四十七名、委託学生八名で法、文、経だけで一千名に達してゐる、変り種としてはタイ国からの留学生サワエン・ケオジンダ君（二六）——神戸高工出、工学部土木工学科専攻——バリヤット・ブルイム君（二五）——秋田鉱山出、燃料化学専攻——がある

同時に新制度による大学院特別研究生七十五名が旧大学院令による新入学生四十二名と共に宣誓を行つた

15 大詔奉戴日と京大の各教室

一九四三年一〇月五日（夕刊）

京大では新学期に当り学園の決戦態勢を更に強化することになり、実践要項の一として毎月八日の大詔奉戴日には講義開始に先立ち、各教室、研究室で一斉に挙式、教授または学生代表が教壇に立つて恭々しく大詔に拝する畏き聖慮を体し奉り時局に対処する皇国学徒の決意を新たにすることになった

16 出席率も素晴らしく 晴れのお招待つ京の学徒たち

一九四三年一〇月七日（夕刊）

角帽を軍帽に代へて、学びの庭から戦さの庭へ、晴れの営門をくぐる日は後五旬日に迫つた学徒の肚は既に決つてゐる、京都府下の大学高専の若人達は銃執る日まで肅然と登校、法文科系学徒はもとより、学窓に残つて科学の決戦場に挑む入営延期の自然科学系学徒も斉しく学業に体育練成にいそしみ総力戦下皇国学徒の真面目を遺憾なく發揮してゐる、いま栄えあるお召しの日までこれら学徒達は如何に意義ある最後の学生生活を送るか、在洛各大学当局にその偽らざる姿を聴く——

京大 来るものが来たまでだといふ感じで学生全体が極めて平静である、過日の始業式の如きも新入生はもとより法文経各学部 of 三回生の出席率も案外多かつた事に教授の方が面喰つてゐる有様だ、大東亜戦以来、激しく移り変わる世相の中に学生だけが超然と学園の中にくすぶつてゐることは耐へられない、何か戦争の真理に触れる世界に敢然飛込んで行きたいといった焦燥感が若いものの血をゆすぶり心持の動揺があつたことは確かだが、こんどの画期的な「学徒動員令」でこの気持はすっかり解消したといふのが率直なところだらう、この一つの現はれが学生の出席率である、彼等は最後の課程を、知識人としての高い教養を身につけてお役に立つて征かうとの感激に燃えてゐる事実はわれわれの想像以上でありむしろ指導する側が学生の健気な心構へに教えられてゐる次第だ、後二ヶ月入営までの期間は短くともあくまで内容の充実した時間を持たねばならぬ、之に対しては寄策対策を練つた結果、新方針が成り既に或る学部では狭いが深く掘り下げたつまり重点的な決戦講義を実施してゐる、征くものへ最後の饒けとしての教授の親心である、また全部が合格するやうに、入営に対応するやうな鍛錬の強化を実施、全学徒が実践苑らの猛訓練を積んでゐるほか、近く全学挙げて戦争目的に挺身するため「学生総躍起の会」を開くべく目下計画中である

同大 文部省から何分の沙汰あるまで従来通りの計画で進めとの示達があり、

これら細則が決定するまでは新しい方針も樹立出来ない、然し学生全体は落着いて勉強してゐるのでわれら当局者の方が教へられるやうな始末だ、何時でもペンを捨てて銃を執るのだといった心構へが学生の肚の中に平常からしつかりと叩き込まれてゐるせい、こんども来るものが来たまでだといった程度で学生の動向の上に少しも変りはない、唯変つたといへば出席率で三課程学生は記録破りの好成績、これで自分らの気持もすつかり落着いたといったものが授業態度からよく読み取られた、さきの陸海の荒鷲志願に洩れたものはこの機会に征けるといつた希望に燃え過日の始業式終了後挙行した閱兵分列式における学徒達の士気の旺盛さは嘗て見ざる真剣味が漲り、戦争に負けたら学校も何もないのでといふ純真な気持が、われら当局者に深い考慮を求めさせられたことである

立大 各講義はこの二ヶ月を以て一応完結する方針が教授会で決定した、講義内容もあくまで決戦下に即応した重点的なものを抜萃しこの講義の教授時間も増やして短期間ながらみつちり叩き込み、最後の仕上げをしやうといふわけ、軍隊式組織の禁衛隊で学生達は平常から十分訓練されてゐるからこんどの学徒決戦態勢も唯入営の日が少し早められたといふだけだから、学園の表情に些かの变化もないといふ頼もしさだ

谷大 新学期から日本教學講座を設け学徒をして日本の死生感^(観)に徹せしめるといつた如何にも宗門大学らしい狙ひ、時間は一講座各二時間、一般講義は午前中に済まして午後開講することに教授会で決めたほか毎週二時間の軍教を四時間に増し入営の日に備へて学徒の体位向上に最後の拍車をかけることになつてゐる

龍大 軍教時間を倍加して学徒達は猛訓練を積んでゐるほか、講義内容も緒論は素通りして文字通り突貫講義を実施してゐる

17 ペン捨てて 京大で「征途に誓ふ会」

一九四三年一〇月二〇日(朝刊)

ペンを銃に代へて国難に敢然赴かんとする学徒出陣の日は迫つた、京大三千の入営若武者達は、いま米英学生共と決戦に相見え、初陣の血祭に上げんとの烈々の誓に燃え、出陣用意に寸刻の儉安もない、京大同学会ではこれら学徒の晴れの首途を壮にするため、十九日午後六時半から法経第四教室で「征途に誓ふ会」を催した、この夜征くもの留まるもの三千学徒は、皇国の御楯たらんと固き決意を面に堂を埋める裡に定刻羽田総長の壮行の辞あり

「前線銃後を問はず齊しく征途に就く学生諸子よ、国家の難局に処して諸子の決意は既に出来てゐる事と信する、国家が諸子に深く期待する高き教養を十分發揮し、敵を叩き落とすと同時に諸子との接触を待つてゐる、共榮圈諸民族に對し恩威並び行はれることが実現されねばならぬ、願くは諸子お召しの日までは、更に真理の探究と訓練に邁進し實際面に即した諸子の最も必要な教養を高めて置かねばならぬ」

との餞けの言葉を送り、之に答へて入営学生代表法学部三回生島田政雄君の訣別の辞あり

「国家を愛し、大東亜を想ひ、全世界の平和確立を希ふわれら学徒の起つ秋は来た、ペンを捨てて銃を執り、新しい使命に征くわれら学徒……皇国の御楯たるの光榮を担ふわれら学徒は鬼畜米英を粉碎せん事を断じて誓ふ……」

と烈々征で立つ決意を披瀝すれば、残留学生代表農学部三回生平松鎮君は「われら残留学生が造つた新兵器を出陣学生諸兄の手に執られる日が必ず来る事と信する」

と出陣学生を激励、満堂息詰まるやうな感激裡に壮行式を閉ぢ、引続き特別講演に移り、経済学部高田保馬教授は「大東亜戦争の意義」と題し

「自由と平等の爲にといふのが敵米英の戦争目標となつてゐるが換言すれば

侵略と搾取の自由の為に戦つてゐるのだ、征で立つ学徒諸子よ世界の人類間に歪められた道義を正すために……大東亜十億の民族が搾取と侵略の鎖を断ち切り、大東亜共栄圏の確立をみるまでは戦ひ抜かねばならぬ、最後の勝利は必ずや正義の上に在りと固く信ずるものである”

と断じ、満堂の出陣学徒に多大の感銘を与へ同八時半意義深く散会した

18 学徒出陣に臨け 京大で来月廿日壮行式

一九四三年一〇月二日（朝刊）

校門から宮門へ一挙〇〇名の学徒を決戦場に送る京大では、その出陣の首途を飾るべく、来る十一月廿日を期し「出陣学徒壮行式」を盛大厳肅に挙行、式後出陣学徒の撃ちてしまふ烈々の熱情と意気を盛り上げて、壮烈なる大分列行進を京大運動場に展開するほか、学内大講演会を開く予定で、目下学生課で準備を進めてゐる

京大で学徒出陣記念大国旗

京大では今回の学徒出陣を記念し絵画の制作、植樹のほかに国旗の制作の計画を進めてゐる、これは出征記念の文字を染めた国旗で西部構内池畔に掲揚、祝祭日や大詔奉戴日に際し学内に留つた学友の手に厳肅に掲揚され、征途にある学友の武運長久を祈るとともに、他方戦地の学生兵はその記念旗のためく学園の空に思ひを馳せるよすがともなり、記念旗を通じて前線と学園とを結ぶ楔たらしめやうとするもので、来月上旬調□と同時に、厳肅な掲揚式が光田学生主事以下出陣学徒参列して行はれることになつた

19 恩師も共に出陣 京大構内の銅像供出

一九四三年一〇月三〇日（朝刊）

学徒とともに召され征く恩師の群像、これは出陣に沸く学園に揚つた感激二重奏―光輝ある学園の歴史に無言の教訓を垂れ、朝に夕に青年学徒が仰いだ京大構内の数多い恩師の銅像が学徒の出陣を前に米英撃滅の金属兵団に晴れの応召する事となつた、こんど供出される像は初代総長木下広次法博（大正元年建立）をはじめ、二代から五代まで四期重任の久原躬弦理博（同十一年）七、八代荒木寅三郎医博（昭和五年）十代新城新藏理博（同八年）の総長陣及び和辻春次医博（同十三年）織田萬法博（同年）の各名誉教授の六体、何れも半身像で国家が管理してきたもの、この他各学部教授の記念胸像九体も挙げて応召するが、これが代替には原見のセメント塑像を建立、昔日のままの面影を留めることになつてゐる

20 空へ医学陣の総力 京大で全国初の航空医学懇談会

一九四三年十一月五日（朝刊）

航空決戦下、軍陣医学の主題、航空機搭乗員の健康維持の研究に挑む航空医学界の権威が一堂に会して全国初の航空医学懇談会が、来る十六日京大医学部事務所楼上に開かれる、当日京大側から内科学教室真下俊一、井上硬、菊池武彦、生理学教室正路倫之助、笹川久吾、耳鼻咽喉学教室星野貞次、衛生学教室戸田正三の各教授をはじめ、関係各教室主管教授が列席するほか、阪大の久保教授、東北大の加藤教授、名大の勝沼教授ら全国帝大の航空医学陣の精鋭が参加、直接戦争科学としての航空医学の総合研究発表並に連絡、研究員の交流などを組上に協議されるが、各大学が従来の割拠主義を捨て、足並を揃へて勝たんが為

の科学戦に総進軍を開始したことは、航空決戦の新しい鍵を把握せんとする激しい科学者の闘魂が看取され、懇談会の成果が大きく期待されてゐる

21 戦ふ学園の全貌を 京大視察の岡部文相

一九四三年一月二日（朝刊）

…この日岡部文相は神戸の日程を終へ午後一時二分京都駅着で入洛直ちに京大を訪れ羽田総長以下各学部長らと昼餐を共にした後、戦ふ学園の全貌を覗くべくまづ工学研究所に到り工学関係緊急科学研究状況を視察、自動電孤熔接機、格子制御放電管、西原式繰返曲疲試□機、小型風洞、音響反射実験、固体乾燥実験、人工雷実□、電子破壊装置などを興深げに参観ついで合成石油工場を経て尊攘堂に到り吉田松陰、品川弥二郎の木像に敬虔な黙禱を捧げて回天の偉業を偲ぶ維新資料を参観、ついで陳列館、農学部、会議室や同部の緊急科学研究状況、附属農場、木原遺伝学研究室、理学部のサイクロトロン医学部の戸田衛生研究室、木村研究室の電子顕微鏡、刈米研究室の南方生薬原料などを参観、同五時過ぎ離学、京大の懇談会に臨み午後九時廿一分京都駅発で帰東した

22 京大葵会結成奉告祭

一九四三年一月二日（朝刊）

十月末以来京都帝大法経両学部教授、助教教授たちが郷軍人有志を中心として皇城鎮護の武神賀茂別雷大神（上賀茂神社御祭神）を奉賛する京都帝国大学葵会の設立が企てられてゐたが準備成つて十一日午前十一時上賀茂神社で結成奉告祭を執行することとなつた

23 目指す全員志願 在洛鮮台学徒、総出陣へ

一九四三年一月二日（夕刊）

醜の御楯として輝く大東亜戦争に内地の学徒同様の待遇により、志願兵として出陣の道が開かれた朝鮮、台湾の在洛学徒らは、今ぞ皇国民の光栄に勇躍、来る廿日の締切りを前に一斉志願への態勢を整へてゐるが、過般来、これら学徒の出陣を意義づけるため、朝鮮では朝鮮奨励会の学徒激励隊が大挙入洛十一日には京大薬友会館で激励会を開き足並を揃へ、十二日には既報の通り奨学会総裁南次郎大将、同理事長川岸文三郎中将を始め、前建国大学教授崔南善、作家香山光郎、京城紡績社長金季沫氏らを迎へ、午後六時からミヤコホテルで在洛学徒総躍起へ呼びかける、これには學術奨励会も協賛し朝鮮学徒の士気を鼓舞する一方、台湾学徒に対しても総督府の意向を体し、関西台湾協会が積極的に働きかけ、過般の京都ホテルにおける激励会を契機として「全員志願」を目指し各大学、専門学校へ働きかけるなど鮮、台若人の意気は目覚ましいものあり、目下の状況は立命館が先頭を切り朝鮮側卅余名、台湾側八名続いて京大、同志社、三高、龍大と続々志願者を出してをり、遅くも十八日迄には学徒の殆どが九月卒業者の後に続いて郷土の声援に応へることになつた

24 残留学徒はお召の日迄研学 京大法文経学生

一九四三年一月二日（朝刊）

今回の臨時措置に伴ひ京大法文系学生の大半は入営入団を見るはずであるが、一方適齡前の学生並に帰還、検査済みの者は後一ケ年若くは当分の間お召のある日まで学園において研学を継続するはずである、なほ学生課で調査した留学生を含む残留者の調査は次の通りである

法学部Ⅱ一回生、三回生、二回生の順序で待機者（若しくは留學生）があり全体で約一割九部強、文学部Ⅲ三回生、一回生、二回生の順序で約三割強
経済学部Ⅱ一回生、三回生、二回生の順序で三割強

右の如く法文経三学部全体で二割強の比率を示してゐるが農学部では停止学科不明のため調査未了であるところから、この比率は多少の変動ある見込みである

25 栄光あり、皇国学徒 京の各学園に 気魄溢る出陣壮行式

一九四三年二月二〇日（夕刊）

生きとし生けるものなべて大みいくさに挙る今、日出づる国の学徒我れ高き師恩に、国恩に報いる秋ぞいざ征かん——蜚雪の思ひ出深い母校の生活も剩す旬日、伝統の校風に鍛へ、栄えの決戦場裡に建つわれ等の学徒は、正義の利剣をかかげて校庭に通ずる営門へ今ぞ進発の秋到つた、京都各大学高専ではこれら若人の首途を莊嚴ならしめるため、廿日一斉に出陣壮行式、仮卒業証書授与式、或ひは教練査閲式など嚴肅にも勇壮な式典に彩り、歓呼天を衝く気魄は米英破摧せずば熄まずの士気を昂揚した

京都帝大

さらば想ひ出の時計台よ、銀杏並木よ今ぞ京大学徒兵は征く、祖国の隆替をその逞しき双肩に担ひて学窓から征野へ荒魂の雄叫び猛く召されゆく、栄えの入営は後一旬、天晴れ合格の喜びを胸に夢は前線を駆けめぐる出陣学徒の壮途に饒けて、京大の壮行式は廿日午前八時半から学内運動場で挙行された

羽田総長以下教職員学生、生徒らがさしにも広き運動場を埋めるなかに執銃帯剣の武装凛々しい出陣学徒〇〇名は定めの位置に集結した征夷の途に就かんと

する学徒兵が門出の心境はまこと秋空に似て□らかに澄み切り、前線の死闘に応へ学業半ばに制服を脱ぐ学徒征く日の雄姿はそのまま興亡を賭する祖国の激しい鼓動を伝えてゐるのだ、感傷もなく、銜気もなく、唯夷敵撃滅の闘魂燃やして世紀の進軍をする学徒兵の逞ましき群像図を、戦ふ学園に描く、ああ壯観なる哉、学徒出陣の朝……

式は国民儀礼の後、羽田総長登壇、今ぞ諸子の進撃路は拓かれた、皇国学徒の本懐これに過ぐるものなしと信ずる、国家が諸子の高き教養と智性にと期待する所洵に大である、諸子の決意また既に出来てゐる事と信ずる、諸子の多年に亘る研鑽は必ずや戦場に花と咲かん、希くば諸子、三千年來皇国伝統の血潮を喚び起し、必勝信念の下に学徒兵の真面目を發揮されん事を……

と温情溢るる饒けの言葉に執銃帯剣の武装凛々しき出陣学徒の一人一人の眉宇に漲る夷敵撃滅の固き決意、燃えたつ闘魂、征くもの送るもの凡てが感激の涙溢れて必勝への誓ひに結び合ふ

続いて残留学徒代表医学部四回生福住一三君の壮行の辞あり

“われわれは出陣諸兄と斉しく既にして選ばれたる学徒兵たるの本分に生きんとす、けふは兄達を送る身なれど明日はこれに続く身であることを想ふ時、俱に感激につらなるものである、われら残留学徒また諸兄に続いて国難に赴かん”と激励の言葉を送り、征くもの留まるもの凡てが若きものの情熱に溶け合ひ全学戦死を力強く誓ふ

これに答へて入営学徒代表法学部三回生吉村敏夫君は

“生ら今や見敵必殺の剣を執り積年の精進研鑽を挙げて尽くこの光榮ある任務に捧げんとす、生らもとより死に後をみせることなく学徒兵の矜持に生きん、生ら誓つて皇恩の万一に報い奉り、先生先輩並に在学学徒諸兄の御期待に応へん”

と征で立つものの決意を吐露終つて総長から出陣学徒へ石清水八幡宮の護符を贈り、一同朗々と「海ゆかば」を斉唱、熱淚籠めて歌ふ学園若人の純情は逞ま

しくも美しき忠魂と凝り、感激は最高潮に達する中に総長の発声で万歳を奉唱して式を閉じ、それより全出陣学徒は学旗を先頭に隊伍整へ分列行進を起し、剣光一閃、朔風を截り踏みしめる軍靴高らかに歩武堂々と農学部前から百万遍を経て平安神宮に到り同九時半から神前で武運長久祈願祭を執行、同十一時過ぎ解散した、なほこの日引続き法文経農（一部）各学部の仮卒業証書授与式が行はれた

〔以下略〕

26 溢る出陣の喜び 台湾学徒激励お茶の会

一九四三年一月二〇日（朝刊）

この身、この腕、このころ、総てを大君に捧げまつらん、台湾学徒の熱烈なる祖国愛に応へて「陸軍特別志願兵制度」が布かれるや在洛の全台湾学徒は天にも昇らん心地で我も我もと志願し、当局はじめ各方面を感激せしめてゐるが、此の溢るる熱誠にこたへ、旺んなる出陣を一層意義あらしめる意図のもとに、関西台湾協会では十九日午後一時半から、京都左京区岡崎法勝寺町の同会主事平岡達三氏宅で「激励とお茶の会」を開いた

集まるもの京大、龍大、同志社、立命大、三高、武専等から勇躍蹶起した台湾学徒廿余名、佐々木京大学生課員、遙々台湾から入洛した台湾日報社員水尾氏、主催者側から平岡主事、台湾総督府大阪出張所長代理西川氏らで

平岡氏の挨拶について各々自己紹介があり主催者心づくしのパイナップルに故山の香を懷しみつつ打寛いだ歓談が次から次へと続けられて行つたが、一言一句は

“この身を挺して殉忠を致す” 機会の到来を心から喜び合ひ
“戦陣で会はう” “お互ひに頑張つてやりませう”

と早くも兵隊になつた気持で平岡主事や京大佐々木氏らへの質問も

“入営までは約一ヶ月の時日があるから、帰省して父母にこの決意を伝えて喜ばしたい” “糧を特配して貰へぬか”

“何処へ配置されるだらう”

等々、また

“この制度が朝鮮より一年遅れた理由は”

などの質問も飛び出す程で大東亜戦争勃発以来の並々ならぬ決意が窺はれた、折柄東上中の長谷川台湾総督から

“諸君の元気な顔を見られぬのは残念だ”

との電話を平岡氏から取次げば満座の意気更に昂り、誓つて御期待に副はんの決意が誰の顔にも刻まれて行くのであつた、かくて出陣を機会に固く結ばれた同郷のよしみに浸つた人々は、後輩の在洛学徒の為に是非かうした集まりを輪旋して欲しいと希望、午後四時四十分感激裡に散会した

27 出陣学徒京都の壮行会 いざ征け、決戦場 平安神宮に晴の首途祝福

一九四三年一月二二日（朝刊）

“必勝の信念を堅持し勇猛果敢敵米英を撃滅せずんば断じて再び祖国の土を踏まず”と烈々たる闘魂を学びの舎から決戦の庭に今ぞ征く学徒に送る百廿万市民の饒け京都市主催出陣学徒武運長久祈願祭並に壮行会は廿一日午前九時半から平安神宮神苑において華々しく挙行された、“海征かば水漬く屍……”今日のこの感激をしつと胸に米英撃ちてしまむの決意を眉宇に身は今此処にあれば心は北の南の大陸の決戦場に馳せる京大、立命大、同大、龍大、谷大、高工、三高、絵専、仏専、高蚕、臨済学院、武専、京都専門、京商の出陣学徒は校旗を掲げて歩武堂々と式場に参集、先輩の首途を送る京一商、一工、二条高

女、堀川高女の後輩学徒式場に参列、定刻九時卅分祈願祭はいとも厳肅に執行、平安神宮寺田宮司祝詞を奏上、篠原市長、出陣学徒代表同大大坪幸弘君、出陣学徒学校代表羽田京大総長、河野京都師団長、安田京都市会議長の玉串奉奠あつて祈願祭を終り、次いで壮行会に移り国民儀礼、君が代斉唱、篠原市長詔書奉読、次いで篠原市長壮行の辞を述べ河野京都師団長、新見舞鶴鎮守府司令長官（石川第三課長代理）雪沢京都府知事（野間内政部長代理）の激励の辞に应へて出陣学徒代表京大酒井平君の答辞あつて「海ゆかば」「愛国行進曲」を斉唱、安田市会議長の発声で聖寿万歳を奉唱、出陣学徒万歳を三唱して式を閉ぢ、出陣学徒は祝酒を戴き平安神宮の護符を受け送る後輩学徒の万歳、打振る旗の波の中を堂々行進散会した

〔以下略〕

28 『征け光榮に生きて』 台湾学徒志願兵の出陣壮行式 けふ平安神宮で挙

一九四三年二月九日（夕刊）

決勝の年の首途に一億血の報国を誓ふ時、皇国民の誇り高らかな台湾学徒陸軍特別志願兵の出陣壮行会は台湾教育会、関西台湾協会の主催で九日午前十時半から平安神宮神苑で厳かに挙行された、此日中部軍管下各学校在籍台湾学徒志願兵は京阪神在住の学友父兄有志らに守られて陸統式場に到着、台湾総督府西村文教局長を始め中部軍司令官、京都府知事、京都市長、京大総長各代理らの来賓列席の上先づ平安神宮寺田宮司奉仕して武運長久祈願祭を執行、引続いて神前広場の壮行会に移り、国民儀礼ののち西村文教局長詔書を奉読、長谷川総督の壮行の辞を代読し

「過去数年、学びの庭の内地学友ら先輩が血の凱歌を前線から齎らして来たのを、君らは胸を叩いて扼腕したことであらう、大詔奉戴して二年、ここに輝か

しい恩命により全台湾の興望を担つて出陣するを得る諸君の眉宇に深く期する決意を見て、その胸中もまた察するに余りあり、征け皇国民の光榮に生きて……」

と親心溢るる祝辞を贈り若き学徒の感激を一段と昂めた、更に中部軍司令官（代理鈴木少将）京都府知事（代理野間内政部長）篠原京都市長、京大総長（代理山本学生課長）関西台湾協会长、関西台湾学徒父兄代表王昭徳氏、在住学生代表南洋五年王玉金君らそれぞれ壮行の辞を饒ければ、志願学徒を代表して、京大法学部三回生陳光熙君が感激をこめて「一死殉国の秋到る我等の決意」を烈々と答辞し、勝抜く誓、海ゆかばの斉唱も力強く万歳を三唱し、同十一時半厳肅にも意義ある式を終了した

なほ西村文教局長を囲んで出陣台湾学徒後援等についての懇談会は、正午から京都ホテルに開かれ府市学校代表ら参加の上後続学徒激励など種々意見を交換午後一時半散会した

29 学帽捨て海兵団へ けふ学徒出身兵ら元氣に入団

一九四三年二月九日（夕刊）

ギルバート島、ブーゲンビル島沖に大戦果を挙げた敵必滅の海軍魂をしつかと胸に抱いてけふ九日学徒出身海兵は殉忠報国の決意と感激も深く海兵団の団門を潜つた、舞鶴海兵団に入団する近畿、北陸等七府県出身学徒のうち北陸地方の第一陣は午前五時卅五分、近畿地方の第二陣は、同十時四十二分それぞれ東舞鶴駅着列車で到着、学帽制服の平常服のままトランクを引つ提げ駅前広場に集合、見送りの父兄らの姿も極めて少く早や一兵となつた心構へだ、人事部下士官指揮下に整然と隊伍を整へ愈もよう見送りの父兄らともお別れだ、人事部樋口中尉の発声で父兄らと共に万歳を三唱して海兵団に急いだ、愈々団門に着

く、再び隊伍整へ紅燃ゆる大軍艦旗を仰いで団門を潜つた、それは恰も母校の校門を潜る如くそつ気ない程に平然としてゐた、練兵場では白い作業服の海兵が寒風衝いて「月月……金金」の猛訓練が始められてゐるのを一斉に熱い瞳で睨めつつ入団、直に指名点呼を受けた後、初の兵食をとり身体検査を受けた。なほ明十日は午前八時人事部長から海兵団長に引渡式が挙行され正式に入団、それぞれ希望の志願書を提出、近く晴の入団式が挙行されることとなつてゐる

30 続かん出陣先輩に 意気高くけふ京大の査閲

一九四三年二月二日（夕刊）

京都師団管下昭和十八年度第二次学校教練査閲は去る十月十九日以来敦賀商業を最初として続行されてゐるが、去る一日先輩出陣のあとを守護しそれに続かん気魄に燃えて日夜訓練に敢闘する京都帝大二千七百学徒に対する査閲は、廿一日午前九時から農大運動場で京都師団山県兵務部長査閲官、仲野大尉、田辺少尉補助官となり、羽田総長臨場の下に勇壮かつ嚴肅に実施された、この朝八時第一陣を承る医学部及び医専受閲者七百五十名は訓練服、巻脚絆に執銃姿も雄々しく日頃の訓練を晴れの査閲に現すべく隊伍堂々担当教官浜島大佐に引率されて入場、定刻八時四十分会場に整列すれば査閲官山県少将は仲野大尉、田辺少尉を随へて臨場、教官から状況報告に次で分隊編成の上移動準備の後直ちに教練を開始、まづ密集教練、小銃各個教練、手榴弾投擲、仮標刺突などの後続いて銃剣術、最後に輕機、擲弾筒、分隊戰闘教練など火華を散らす一大戰闘教練が次々に展開された上、一同整列、あたかも前日発表されたタラワ、マキン両島守備隊柴崎少将以下四千五百勇士の英靈に感謝の黙禱を捧げた、更に試問に入り浜島大佐から

入営者と残つてゐるものの心構へ如何

「残つて居る者は出陣先輩と同じく兵營にゐると同様の氣持で教練に励まねばなりません」

などの試問応答にやがて衛生部將校となるべき烈々の氣構へを見せるのを山県少将これを具さに査閲、かくして冷寒肌を刺す洛北一帯に銃声をひびかせ日常の猛訓練振りとう出陣先輩に続くの燃え上る意氣を遺憾なく發揮して第一陣を終り続いて十時廿五分文農科三百名（教官前広中佐）十一時廿分理工科二百名（教官専田大佐）零時四十五分各学部、医専の狹窄射撃、午後二時から法経科四百五十名（教官専田大佐）三時廿五分から全学徒整列山県少将はじめ羽田総長、全教官臨場の下に閱団分列が行はれ四時終了

引続き総長室において山県兵務部長から所見開示について懇談が交はされた

31 学徒ら決勝配置へ 逞し「兵学一如」目指す京大の布石

一九四四年一月四日（朝刊）

昭和十八年度の教育界の変貌はわが文教史に新しい一頁を画するものであつた、「教育に関する戦時非常措置方策」の発令実施、徴兵適齡一年低下の実施、これに即応する学校整備要項の展開、学徒勤勞總動員計画の実施など生産戰、科學戰への文教の積極的協力はまこと兵学一如の逞ましい前進であり、文教の分野もまた戰爭完遂の大目的に帰一して再編成をみたものであり、それだけに学園の性格の百八十度転換は正に画期的意義をもつものといへるが、いま茲に決勝第三年を迎へて京大の戰闘配置を聴いてみる――

本年度において理工農医各学部を通じて二百名の定員増加を行ふとともに工学部に航空電氣学、理学部に燃料地質学の二講座を新しく開設、之に併行して既存の化学研究所の機構の拡充強化の図るほか中等理科教員養成所の新設も織込まれ、自然科学陣の充實強化を図る、更に八万二千元の予算で「京大南方科学

研究所」を新設、人文自然両科学部面に亘り南方に関する科学的究明に当ることとなつたが、これに伴ひ、既設の南方文化研究会（文学部）南方工学研究会（工学部）南方医事研究会（医学部）南方科学研究所（理学部）南方経済事情調査会（経済学部）南方農林資源研究会（農学部）南方法制研究会（法学部）南方農業研究会（農学部）の八研究会を傘下に包括、今年十月一日開所の予定である

また決戦調を盛り上げた新講座としては航空医学の権威眞下教授の「循環器に対する高度並に加速度の作用」正路教授の「血液及び呼吸に関する高度の作用」星野教授の「平衡知覚に関する加速度の作用」笹川教授の「肉体的航空適性及び疲労」三浦教授の「精神的航空適性及び疲労」など特別講義を開き学鷲の基礎教育に当るほか、経済学方面の新年演習に汐見教授の「財政と戦力増強政策」八木教授の「戦時食糧政策」谷口教授の「東亜経済の諸問題」小島教授の「東亜共栄圏の金融機構」蜷川教授の「戦争経済下の経営と計算」等人文、自然両科学面に亘り教学体制の重点的切換へを断行する、更に練成面では報国隊の勤勞動員態勢を強化、三月末日まで滋賀県下土地改良に出動するほか防空訓練の学徒隣組制の強化を図る

また中級グライダーを購入して滑空訓練を開始するほか、特に軍教では画期的強化を図り、兵学一如の学徒兵の訓育に教授と学徒が一体となつて服務するなど打てば響く学園戦士の決勝態勢を確立することになつてゐる

32 京大 張切る『敵前教育』 法、経、文の待機学徒兵たち

一九四四年一月一七日（朝刊）

想ひ出深き時計台を後に学窓から征野へ大半の学生を送つた京大法経文三学部では、約三千名の学徒を擁した大世帯を急に切詰めたこととて、各教育面に相

当の変貌が齎されたのも当然であるが、まづ学生数の減少で、これまでのやうに法経第一以下の大教室利用の講義は必要をみなくなり、専ら小教室を利用しての寺子屋式教育に転換して戦局の進展に即応した集中講義を実施、講座時間割の変更も要は演習制度の充実活用、教授、学生の一体化により短期修業を期してゐる、しかもこれら待機学生の殆どが一年後には適齡で栄えの入営、入団者として送り出す關係上、健兵鍛練に重点を置き、経済学部では毎週一回午後（一時から五時まで）全学年同時に錬成行軍を実施するほか軍教を毎週二時間宛各学園毎に実施、また法学部では従来の土曜午後の錬成行軍に加へて火日曜にも実施するほかこれも毎週二時間宛を軍教に割き出欠不良のものは落第といふ強硬処置に附することになつてゐる、またこれら必須科目外に勤勞動員を併せ行ひ、現に学徒は連日滋賀県下における土地改良作業に服し寒空の下に熱汗を流してゐるほか去る十日から廿三日までに亘る「耐寒心身鍛錬強調週間」に呼応して猛烈な学徒寒稽古を実施してゐるなど法経文待機学徒兵の敵前教育は月月金金の前線に應へて敢行されてゐる

33 増産の凱歌高く 京大勤勞報国隊の一行帰る

一九四四年一月三〇日（朝刊）

「一粒でも多くの米麦を」と湖国の土に挑み、比叡風を衝いて増産一路、土地改良事業に挺身敢闘した京大勤勞報国隊二百四十五名は増産の凱歌高らかに廿九日午後四時五十分京都駅着で帰洛した、勤勞の感激を泥まみれの制服に包んだ学徒達の陽灼けたその顔、節くれ立つたその手は十日間の激しい戦ひの跡を語つてゐる、巻脚絆姿凜々しい西本、大隅両法学部教授汐見経済学部教授、佐波、白杉、田杉同助教授らの号令で各班毎に駅頭に集結、点呼が終へれば出迎への渡辺法学部長から一場の挨拶あり

「諸子は教官と渾然一体となり確実に勤動作業の目的を達せられ、その間一名の発病者もなく日頃鍛錬の成果を遺憾なく発揮されたことは御同慶に堪へない、特に勤労作業を通じて終始執られた秩序正しい行動と精神的規律が学徒の集団勤労に意義深い成果を収めたものである」

と犒ひの言葉を饒け全員これに応へ、勝ち抜くための誓ひを交して解散した、なほ中国留学生で拓土部隊の一人、経済学部学生姚景華君は語る

「京大班は滋賀県の野洲郡、中畑、小津、兵主、篠原各村へ出動しました、母校の名譽にかけて全員が火の玉となつて戦ひ抜きました、今のわれらの気持は単なる勤労観といつた生優しい感情では律し切れない切実な感激で身の内が一杯です、土の香りを掘り起す一鍬、モッコに運ぶ客土の一塊が直接戦力化に役立つのだと思ふと流れる汗にも大きな感激が滲んできます、一番愉快だったのは土と戦ふ教官や学徒、それに土地のお百姓さんとの三者の心が完全に結ばれてゐたことです」

34 決戦学徒の底力 京大生、耐寒行軍に意気烈々と

一九四四年一月三十一日（朝刊）

一億の興望を双肩に担ひ、学窓から勇躍戦野に征で立つた出陣学徒に続かんと来るべき営門を潜る日に備へて只管心身の錬磨に勤しむ待機学徒達の闘魂を結集する大日本学徒体育振興会主催の全関西学徒耐寒行軍大会は既報の如く卅日全関西の大学高専十一校の学徒二千名が参加して挙行されたが、この日京大生七十余名は午前九時東寺南門を出発、光田学生主事、田畑同主事補の指揮の下耐寒行軍を開始、途中実戦宛らの敵前訓練を展開しつつ同一時過ぎ目的地桜井青葉公園に到り、全員合流して綜合体育演練を行ひ、終つて桜井神社を経て水無瀬神宮に参拝、戦勝祈願をこめたが六十余キロの全行程を一名の落伍者もな

く踏破し、決戦下学徒の底力を遺憾なく発揮した

35 京都出身学徒兵激励記 特輯

一九四四年二月二日（朝刊）

学徒たちが学窓からペンを抛ち、書を捨て、欣然君国の要請に応へて戦陣に馳せ参じてから早くも二ヶ月、彼らは弾雨下到大君のために一身を捧ぐる日を待ちつつ日々の熱鉄の鍛錬によつてあくまでも一兵として後続学徒よ我に続けとの意気も高らかに燃ゆるやうな気魄を見せて頑張つてゐるが、これら学徒兵を送り出した京都の各大学関係者は過日、これらの学徒兵の逞ましくなつた姿を視察すべく當庭に訪れてかつての師として温情にみちた激励を与へたが、以下にこの視察を終へた立命館大学教授太田義夫、京大学生主事山本俊雄、同志社大学学生主事水内数之助の三氏に親しく学徒と見えて一兵としての彼等の姿を綴つていただいた

逞しきこの姿よ 京大学生課主事 山本俊雄

学徒兵たちは早くも部署について命令一下を待つてゐる。兵務部長、三七部長の挨拶があつて愈々訓練が開始された。小銃、機関銃、擲弾筒、各種砲、通信といふ順序で訓練は進行してゆく。ここ練兵場の一隅、豊太閣の伏見城趾で洵に景勝の地勢になつてゐる。すつかり霜枯れた薄をかき分けて駈け出して来ては喊声諸共に突貫する。或は弾薬箱を引きずりながら匍匐前進する様は実戦さながらの気魄である。擲弾筒からは弾が飛びだす機関銃は火を吐く、忽ちにして練兵場を占拠してしまつた。今日ばかりは破格で兵務部長、部隊長から足の開き具合に至る迄こまごまとやさしく注意を受けてゐる。こちらではシャツ一枚になり銃剣術の踏込みの猛練習が開始された。

学徒兵だけで眼鏡の多いのが気にかかるが、その眉宇に籠る真剣さはもうすっかり学生臭を脱して何れも立派な兵士になり切つてゐる。

訓練が済んで出身学校別に集合して面接を許された。いち早く円陣を作つて恩師たちを取り囲むところもあり、今瞬前の猛訓練に引き換へて忽ち打寛いだ情景を点出する。総長は激励の挨拶の後手をとらむばかりに近寄つて犒ひの言葉をかけられる。配属将校は皆に手を出させて凍傷に膨れ上つた手を撫でていたはられる。入隊以来丁度二ヶ月で（この隊ではまだ一日も休日といふものは無いのださうであるが）こんなに見違へるばかりになるものかと私は各々の面魂に見入つていふ言葉も出ないのである。

午後は〇〇部隊の訓練を京都練兵場で見学する。今度は歩兵の訓練と違つて砲の操作、測角、測距、或は通信といひ大分技術的要素が多くいかにも学徒兵らしい鋭敏さを感じることが出来た。乗馬訓練の如き入隊して初めて馬の手綱を採つた者も多からうと思はれるのに、もうすっかり要領をのみ込んで広い練兵場を乗り廻してゐるのを見ると如何にも頼もしい気持で一杯になる。訓練が終つて面接が許された。恩師を見附けて駆け出して来る者もあり、走り寄る教官もありでここでも亦忽ちの間に出身学校別に喜の団欒がいくつもいくつも出来て白い歯が笑ひ出す。私はこの元気に溢れた学徒兵たちの顔を見ながら丁度二ヶ月前のあの壮行式の日の感激を心ひそかに思ひ見るのであつた。

〔以下略〕

36 堂々、八十軒夜行軍 京大生ら耐寒夜行軍

一九四四年二月二〇日（朝刊）

既報京大^(学)同楽会並に医学部芝蘭会共催の耐寒夜行軍は、十九日夜から廿日にかけて決行された、この夜五時、参加学徒百八十名は医学部事務所に集結、隊

長医学部三回生宗野重和君から服装点検、行軍中の諸注意を受けた後、執銃着剣の武装凛々しく、堂々の進軍を起したが、それより奈良街道を南進し奈良を経て橿原に到る八十軒の行程を踏破、廿日午後二時頃橿原神宮に参拝、征戦完遂、出陣学徒の武運長久を祈願して解散する

なほ当日は笹川久吾教授、大谷卓造助教以下生理学教室員が橿原に先着、参加学徒に就て疲労度の測定を行ひ、文武一如の成果を期すことになつてゐる

37 師弟携へて突撃 戦ふ学園の道は一つ 京大光田学生主事語る

一九四四年二月二六日（夕刊）

大本営発表に呼応して発せられた一億総躍起の決戦非常措置大号令の下、学徒勤労働員は愈よ三月一日を期し、敵前突撃を開始することになつたが、既に京都府下大学高専廿一校では「学徒報国隊京都地方支部」の結成をみるとともに支部長羽田京大総長以下各学校の陣頭指揮は最高度の指導性を具備した勤労働態勢、防衛態勢を確立、打てば響くの鉄桶の陣を布いてゐる際とて、これが積極的な敵前展開の戦果こそ刮目して待たれるが、翻つて学徒はどう在るべきか、何をなすべきかについて明快な解答を与へた戦ふ京大光田学園の布陣を光田学生主事に聴く

「われらは今何をなすべきか、の問題は既に学徒が明快な解答を与へて呉れた、出陣学徒に続かん、先輩学徒に応へんの盛り上る熱意、燃え上る闘魂は法文系待機学徒、理工科残留学徒の別なく学業、勤労の両面に端的に反映してゐる、今こそ容易ならぬ新しい心構へが要請されるが、痛憤極まる大本営発表によつて全学徒の哀惜と復仇の念はそのまま必勝勤労の一点に凝集されたことである、既に学徒の心構へや用意は出来てゐるが、只これが指導力の強化如何である、学校当局では今回の非常措置に先立ち勤労働員の画期的強化を着々実行し

てゐるが、更に師弟同行、全学一体の勤労精神に徹せしむるために、法経文の三学部では教授、助教授等の全教官を勤労報国隊附とし非常動員の命令一下名と共に学徒の陣頭指揮に起つて挺身することになった、また理工農医の四学部では長期勤労動員に備へ、講座をどういふ風に按排するか、即ち長期勤労作業と学業との調整を考慮してゐたが、これも成案を得、後は実行に移すばかりとなつてゐる、学徒達の鋭い観察力は兵学一如の国家的命題をはつきりと掴むとともに、勤労決戦に伴ふ労力資材の不足といふ隘路をその盛り上がる気魄で押し切らうといふ決意さへ固めてゐる、要するに大本営発表がもたらした具体的な学園の動きとしては教官、学生が一丸となり軍教、学業、勤労の三位一体化がけふからはつきり形の上に現はれたことである、軍教にしろ、勤労にしろ指導階級の懸け声ばかりでは戦果は挙げ得られない、教官も研究室を出て学徒とともに泥塗れになつてこそ指導力が強化されるわけである、戦ふ学園の向ふべき道は明示された、今は必勝の彼岸に突撃するのみである”

38 挙げた数々の戦果 京の各大学、昨年の動員

一九四四年三月九日（朝刊）

学徒の第二次出陣命令―勤労動員強化の具体的な方法が七日夕刻発表され、戦ふ京の大学高専以下男女各中等学校はもとより国民学校の高等科児童までいつでも必要に応じて出動すべく着々準備をすすめはじめたところもあるが、京の各大学が昭和十八年度に行つた勤労奉仕の模様は大体次の通りであり、四月からは更に一層の奮闘を誓つてゐる―

京大

昨年七月九州三池□錬所の農地開発営団作業場へ農学部学徒八十一名、胡麻郷村へ千百〇五名が夏期休暇を返上して出動したのをはじめ、京都市内の防空壕

作業に九百八十六名が繰出し一方医学部学徒で編成の診療班卅六名は鳥取、広島両県下の無医村へまた工学部学徒は超短波標定機調整検査のため〇〇方面へ出動更に十二月一日から今年一月にかけて京滋地方ほか一府十一県下へ農業工学、土木工学両科学徒が出動、水田造成など土地改良作業の指導に当り、また同月中旬から廿日間にわたり医学部四回生百名が陸海軍病院、市内各病院へ、土木工学科学徒の別動隊卅名は十二月四日から年末まで京都松ヶ崎の戦技訓練所の建設測量に従事した、更に今年に入つては一月十日から廿九日まで滋賀県下四箇村の土地改良作業に、医学学徒二百名及び法文系三学部学徒二百七十名が繰出したほか帝都の各軍需工場や通信機関の技術的作業に電気工学科学徒を出動させるなど専門に応じてその特技を勤労に生かし生産増強面に寄与した、なほ来る十五日から府下〇〇地方へ二週間、島根県下〇〇地方へ廿日間に亘り電気工学科学徒を動員、電波関係作業に従事させ、学徒の技術的特性を戦力増強の一点に集中させることになつてゐる

〔以下略〕

39 敵前突貫 大号令下る！ 京の学校報国隊 実施計画本極り

一九四四年三月一六日（朝刊）

京都府下廿三校の大学高専師範の学徒総動員体制を確立し学園の護りに、増産の勤労に報国隊活動の画期的な推進を約束して巨歩を踏み出した「学校報国隊京都地方部」結成後、初の動員実施計画がこのほど本極りとなり地方部長羽田京大総長から待機中の各校報国隊に敵前突貫の大号令が発せられ、既に十五日出発した報国隊もあるが動員の全貌は次の通りである

まづ京大では理学部地質鉱物学科第一班はアンチモノ―鉱探査のため奈良県下の高津鉱山ほか廿一鉱区へ、第二班はコバルト鉱探査のため奈良、和歌山、両

県下の堂ヶ谷鉦山ほか十四鉦区今月末日まで出動、また農学部農林工学科は□頓仕上作業補助のため久保田鉦工所○○工場へ五月九日まで出動、文学部各回生並に農学部第一回生は土地改良作業のため今月末日まで滋賀県下盤根村並に油日村へ、工学部へ航空学科並に機械工学科は航空機増産作業のため四月十九日まで愛知航空○○工場へ、同鉦山学科は銅、アンチモニー鉦探査のため四月一日から十五日まで奈良、和歌山両県下の各鉦区へ、工学部第一回生（電気航空、機械土木を除く）並に理学部第一回生は同じく四月一日から十五日まで滋賀県中里村ほか各村へ、京大医専第二回生は同県下篠原村へ四月一日から十日まで夫々土地改良作業に出動、法、経両学部各回生並に京大医専第一回生は四月一日から廿日まで島根県下の災害地流入土砂取除作業に出動、工学部電気工学科特別班は四月から九月まで芝浦電気、住友通信、日本無線の各○○工場へ、超短波標定機の調整検査に出動するほか、三菱電気○○工場へ四月上旬から向ふ二、三ヶ月間電気機械製作作業に出動を目下交渉中である、次に理学部地質鉱物学科第一班は炭田地質調査のため蒙疆大同へ、第二班は各種鉱物地質調査のため蒙疆興和へ六月一日から九月三日まで夫々出動、農学部林学科各回生は製材作業のため六月上旬から向ふ二、三ヶ月間府下北桑田郡京大芦生演習林へ、工学部航空学科第二回生は航空機増産作業のため四月十日まで日産輸送飛行機○○工場へ、同土木工学科第一回生は四月一日から十五日まで工場敷地測量のため日本稀有金属○○工場へ、同建築学科第三回生は四月一日から末日まで同第二回生は五月一日から六月末日まで夫々建設現場監督のため中部軍経理部○○出張所へ夫々出動する

このほか府下各大学高専部隊の動員計画も決定したが、主なるものは次の通り京大農、文両学部、府立医大予科、三高、立命館専門部、同志社学部、薬専の各校は廿日頃から向ふ二週間、京大理、工両学部並に附属医専、大谷大学、立命館学部並に予科、高蚕、絵専、武専、臨済学院専門部、西山専門学校の各校は四月上旬から向ふ二週間それぞれ滋賀県下の土地改良作業に出動するがこれ

が出動人員は両期間を通じて二千五百名である、このほか島根県下の災害地復興作業に京大法経両学部並に附属医専、三高、龍谷大学、京師、高工、同志社（予科、専門部、高商）仏専、京専の各校千八百廿四名が出動引続き五月には約千名の学徒が大挙繰出す予定である

40 災害地復興へ 京の各四学徒報国隊が出動

一九四四年四月二日（朝刊）

遅しき学徒総進軍□の律動と共に戦ふ学園の春開く――

決戦非常措置の学徒動員実施要綱にもとづいて京の各学園には目下陸続と各方面へ出動、燃ゆる闘魂を勤労増産面に叩き込んでゐるが京大に本部を置く学徒勤労報国隊京都地方部には、島根県下の災害地復興作業のため京大、京都工専、龍大、仏専の四報国隊動員を下令、十日午後七時五十三分京都駅発で一路現地へ出発したが京大の出動人員は法文経三学部の一、二、三回生並に附属医専生で、谷口経済学部部長の陣頭指揮の下斎藤、田中両法学部教授加藤同助教授、青山経済学部助教授、山岡同講師、芝田附属医専講師らが中、小隊長となり学徒と共に□身する、尚引続き今十二日は同時□発で三高、師範、京専、同志社（予科、専門学校、高商）の編成部隊が島根県下へ出発することになった

41 戦ふ科学研究、待たる戦果 京大、府立医大両学園に遅しき鼓動

一九四四年四月二日（朝刊）

戦局の様相は愈々生産戦、科学戦の性格を濃化するに伴ひ、直接戦力化に資する科学技術研究陣の整備、動員の強化が要請される折柄、文部省、科学研究費

制度の助成で割当られた京大、府立医大両陣営の緊要研究も足並を揃へて着々進捗中でその戦果こそ刮目して待たるが、いま世界最高水準を目指す科学技術の基礎培養として国家の命題に応へんとする戦ふ両学園の全貌を描き米英撃滅へ総進軍する科学戦士の逞ましき鼓動を伝へよう――

京大 各分科別による緊急科学研究科目○○題をはじめとし、工学部では近藤教授の「南方に於ける日本人の住宅」松田教授の「南方に於る太陽輻射線」堀尾教授の「南方用衣料及衣服」の研究があり、理学部では石橋教授の「南方に於ける飲料水及用水」ほか「食品の化学的研究」「東亜熱帯地方の野生動植物と人類との接触に関する研究」「貝類、陸水生物の研究」など農学部では春川教授の「南方の昆虫」近藤教授の「南方の食糧自給上適當なる種類並にその栄養価」榎本教授の「南方産纖維の現地日常生活利用」梶田教授の「南方産材種の家庭使用」の各研究がある、また医学部では戸田、笹川両教授の「高温時労働能率増進策」三浦教授の「高温時の精神機能」戸田、井上両教授の「熱帯栄養」木村教授の「デング熱の接種培養予防及び治療」古沢教授の「耐暑力と風土馴化及び高温時の筋肉作業」刈米、荻生両教授の「熱帯用植物」の各研究がある、なほこれら自然科学、応用科学と並んで人文科学でも戦力増強の一点に研究目標を集中し、文学部小牧教授の「南方の地政学的及び地理学的研究」は注目されるものの一つである

〔以下略〕

42 どつと決戦の空へ 京の若き学徒ら先を争つて志願 陸軍特別操縦見習士官

一九四四年四月二三日（朝刊）

京都師団管下における本年度陸軍特別操縦見習士官召募は去る三月十三日受附開始以来決戦の大空を目指す志願者殺到し、就中去る十四日から三日間に亘り

猛訓練中の先輩見習士官が母校を訪問「僕等が続け」と親しく現況を報告するや更に志願者が激増し、好成績裡に廿日締切られ、京都師団兵務部ではこれが整理を急いでゐたが、廿二日志願者総数千七百七十四名に達し、予想数を遙かに突破した旨並に第一次身体検査実施日を次の如く発表した

志願者数 △京都繊維専門（一九五）△立命館大学（二七七）△京都薬専（五九）△同志社経済専門（五五）△同志社大学（五四）△龍谷大学（四八）△京都師範（四五）△仏教専門（四四）△絵画専門（四二）△京都帝大（三八）△大谷大学（三六）△三重農林専門（三六）△武道専門（三三）△京都工業専門（二四）△福知山工業専門（二三）△福井工業専門（二二）△三重師範（二〇）△臨済学院（一九）△滋賀師範（一七）△西山専門（二四）△同志社専門（一一）△京都専門（一一）△高田専門（二〇）△京都青年師範（八）△神宮皇學館大學（七）△三重青年師範（六）△滋賀青年師範（五）△福井青年師範（二）△京都医大（二）△彦根経済専門（二）△卒業生（九〇）△管外学校在学者（二四）

43 これこそ真の錬成 視察激励の羽田京大総長が感激 災害地に戦ふ学徒

一九四四年四月二八日（朝刊）

島根県下災害地流入土砂取除作業に出動中の京大、三高、龍大、工専、師範、同志社（専門部と予科）仏専、京専、同志社経専等、郷土学徒部隊の敢闘振りを視察激励した学校報国隊京都地方部長、羽田京大総長、松本学生課長の一行は、既報の如く去る廿二日午前八時〇五分京都駅発で松江市に向ひ、廿三日島根県知事山田武雄氏（京大法学部大正十一年度出身）及び同知事と同期生で目下学徒部隊の陣頭指揮に当る京大法学部教授岡良一博士らと会談後安濃郡河合村方面を巡察し経済学部生を激励、引続き廿四日は同郡河合村、長久村方面

の法学部生を、廿五日は邇摩郡温泉津村方面の工専、京専生を夫々激励廿六日夜帰洛したが、其間猛雨を冒し四里の山道を徒歩で巡察する老総長の姿は若き学徒達を感激させたといふ、なほ羽田総長は廿七日視察の印象を次の如く語つた

「現地の生活は毎朝六時起床、清掃、同卅分から朝礼、神社参拝、体操八時から正午まで作業、引続き午後一時から同五時まで作業となつてゐるが、教官や村民と渾然一体となり敢闘する学徒の態度は全体として秩序正しい行動と精神的規律に終始し、また不便不自由に耐へ、清新潑刺とした気分を注入して災害地を明朗化してゐるがこの明るい精神的糧の贈り物は土地の人達の先入観を裏切つて学徒達を見直し心から感謝されてゐるやうだ勤労の感激を泥塗れの制服に包んだ学徒達の陽灼けた顔、節くれ立つた手は半ヶ月間の激しい戦ひの跡を語つてゐるが、母校の名誉にかけて戦ふ学徒達はこの尊い作業を通じて眞の錬成があるのだといふ確つかりした理念を掴んでゐるのに満足し、集団作業に意義深い成果を収めることを期待して帰つたわけである、また病氣などの事故も案外少いことも学徒の闘志を語るものだらう」

なほ学徒部隊の先発隊は来る卅日、第二陣は五月二日帰洛の予定である

44 京大強歩大会

一九四四年四月三〇日（朝刊）

京大同学会主催の第十二回強歩大会は廿九日の佳節午後十二時半から挙行定刻参加学徒〇〇名は運動場前―北白川―山中道―近江神宮間を三時間余で往復、学徒行軍の新記録を樹てた

45 京大の勤労働員学徒帰る

一九四四年五月三日（朝刊）

島根県下災害地流入土砂取除作業に出動中の京大ほか京都の大学高専学徒部隊は去月卅日第一陣が帰洛したが続いて第二陣は二日午前七時五十五分京都駅着で帰洛、駅頭で意義深い解散式を挙行、総指揮大城三高教授の懇切な感謝の挨拶があつた

46 働き抜くぞ勝利の日まで 京の学園学徒出陣の晴れ姿

一九四四年五月二日（朝刊）

世紀の勤労出陣譜高らかに学徒は征く…一年はおろか五年十年、勝ち抜く日まで働きつつ学ぶ増産戦線へ………遅ましき敵前配置は今ぞ展開された、学窓から工場へ、鉱山へ、病院へと挺身する学徒出陣の晴れ姿をいま京の各学園にみる――

京大 法文経三学部二回生は来る廿日から向ふ三ヶ月間〇〇工場へ出動理工農医四学部三回生は同じく廿日から各自の就職先に九月の卒業予定日まで出動、また二回生は同じく廿日から向ふ三ヶ月出動、各方面の工場、鉱山、研究所に配置されることに決定、これが細目が十一日発表された

同大 来る十六日開かれる近畿大学高専打合会の結果を俟つて細目を決定するが既に受入先は大阪〇〇工場と決定、出動は大体廿日頃となる見込

龍大 学部三回生、予科三年生が来る十五日から向ふ三ヶ月間大阪〇〇造船所へ、また専門部三年生は同じく十五日から向ふ三ヶ月間名古屋〇〇製鋼所へ出動する

谷大 学部三回生は卒業予定期日までまた予科並に専門部各三年生は向ふ三ヶ

月間〇〇造兵廠へ出勤する

立命館 学部三回生専門部三年生、予科全学年は今十二日から向ふ三ヶ月間愛知県下〇〇工場へ、また学部一、二回生並に専門部二年生は舞鶴〇〇工場へ来る廿日出発、向ふ三ヶ月間敢闘する

府立医大 既報の如く去る十日〇〇陸軍病院へ出勤

京都工專 二年生全員が来る十五日から岐阜県下〇〇工場へ出勤する

このほか京都織専、薬専、京都絵専なども十六日の近畿大学高専の打合せの結果を俟つて出勤先、人員、日割など細目を決定するが既に出勤準備は完了してゐる

47 使命に生拔かん 「征く日まで工場で」の決意も固し 勤労出陣学徒らに聴く

一九四四年五月一三日（朝刊）

学窓から戦野の出陣学徒が征で立つ日、銃後のことは俺達³に任しておけ、頑張つて来い」と饒けた激励の言葉は単に多感の情熱をゆすぶつてぶちまけたに過ぎない言葉であつたらうか、否あの言葉こそ征で立つ学友と等しく皇国の存亡を双肩に托された残留学徒の凛然たる覚悟の披露であつた筈だ、その覚悟と誓ひの言葉もいまぞ戦線の学友に銃後の社会人に示す好機が与へられた、それは歴史的な意義をもつ学徒通年動員の下令である、学園の栄光、否祖国の要請と国民の輿望を担つて生産戦線へ征で立つこの感激は、曾つては一部に戦局に対して無自覚と批判された学徒が斯くも健全に甦り、決戦下の学徒として恥ぢざる自覚と実行力となつたのだ

「征く日までは工場で頑張らうぜ」

を合言葉に増産戦線へ出陣する学徒工員の逞しき生命力をみよ、学徒の向ふべき道は示された、学徒の総力を必勝の大目的に帰一して世紀の進軍は展開され

た、いまはただ突貫あるのみ……茲に学校当局の期待と学徒の決意を聴き、もつて壮行と訣別の辞とする

本来の使命へ 京大松本学生課長談

本学では通年動員の第一陣として来る廿日法経文三学部の二回生が愛知県下の〇〇工場へ出勤することになり、また三回生は殆んど就職先が決定してゐるからその方面へ夫々配置され、場所によつては教官も出勤して文字通り師弟同行の現場教育を施し六月の卒業と同時にそのまま就職して了ふことになる、なほ一回生も目下の所持機の姿勢にあるが、これも逐次受入側との折衝を俟つて夫々の特技能力を加味した適性配置をみる筈である、一方理、工、農、医四学部の三回生は残留学徒とはいへ、既に勤労報国協力令にもとづき就職決定先や各地の工場、鉱山、農場、病院、研究所などへ出勤し、技術的な特性が活用されてゐるので、現在学園に残留してゐる実数は極めて少く、またこんどの通年動員には病弱者も進んで参加することになった複雑な作業を真剣にやること自体が学徒に磨きをかけることになり、働きつつ学ぶといふ尊徳精神が今回の勤労にはじめて生かされるのである、学校でなければ勉強出来ないといふものの考へ方は捨てて働きつつ修養を忘れず本を読み話を聞く……即ち勤労作業や寄宿舎生活を通じて生きた人物を作るのが真の教育の在り方だと思ふ、学徒諸君は習得した教養を十二分に勤労に活かし学校と本質的に別れるのではなく、緊急の要請によつて一時教育の形が変り、現場で勉学するのだ……勝利の日にはまた学校へ帰るのだといふ気持を失はないで欲しい、工具として機械と取組んだ以上は教育即勤労、行学一体の精神に徹し、総てを大君に捧げまつるのみわれの自覚に出発して学徒本来の使命に生き抜く事が大切である、また受入先も学徒工員に対しては生徒のもつ教養と智性を十二分に活かしその素質を伸ばしてやれるやう高い段階からの適切な指導者を配置して頂きたい事と寄宿舎に読書室を設けるなど行学一如の学徒精神に徹し切つて能率を挙げ得るやうな環境を作る事に心を配られたい、学徒の実力については既に過去の輝かしい勤

労成績に照して評価済である、学徒は大丈夫やつてゆく……曩に出陣した学徒出身兵に應へる覚悟と熱意は何物をも灼き尽さないでは置かないであらう――

要請に應へん 京大法学部二回生 石井勇二君談

通年動員の命令を受けいよいよ戦局の容易ならざるを覚えるとともに我等学徒の責の重大さを痛感します、今度はじめて直接兵器製作の仕事に従事出来ることになり、出陣学友が手に執る武器は我々の手で作るのだといふ大きな感激と残留学徒の責任を果し得る絶好の機会が与へられた喜びは言葉に尽せません、我らは学徒であり研学が御奉公の途であります、今日これだけが御奉公の全体ではありません、自己の総合的な力を活かすことがまた御奉公であります、行学一体の精神を堅持して学徒工員の面目にかけて祖国の要請に應へる覚悟です、仕事の上に心配して下さる学校当局の温かい親心は有難いですが、これに甘えてはならないと思ひます、たとひ作業でくたくたに疲れても学徒の本分である書物と取組む事を忘れてはならぬと思ひます、征で立つた学徒兵の覚悟はまた我らの覚悟です、我らの携はる仕事は直接戦場に通ずるのだといふ感激に唯身を任せるばかりです

48 恩師が激励の饒け 京大・谷大で出勤学徒の壮行式

一九四四年五月二〇日（朝刊）

学徒通年動員の京大第一陣として法経文各学部二回生が愈々廿日午前八時廿二分京都駅発で出勤するが、出発に先立ち法学部では十九日午前十一時から法経第四教室で壮行式を挙行、大森教授の司会で厳肅な国民儀礼の後渡辺法学部長は

“学徒たるの矜持を失ふことなく、行学一体に徹し学徒の真面目を貫かれよ、さらば諸子、ここに栄ある出陣を寿ぎ、健闘を切に祈る”

と温情溢るる言葉を饒け、また在学生を代表して三回生池田万年君は

“我等また諸君に続かん、兵として征く日まで相共に学徒の本分に生き抜かん”

と訣別の辞を送れば答へて出勤学徒代表二回生石井勇二君は

陸に海に空に征で立つた学徒兵の決意はまた生らの決意たり、生ら誓つて残留学徒の責務を果さんと烈々の決意を披瀝

正午過ぎ意義ある式を閉じた、

また大谷大学でもこの日午後一時から同校講堂で挙行、国民儀礼について山辺学長、藤島学生監、徳重教授の激励の辞、在学生代表福島豊（学部）高浜純雄（予科）桐山正仙（専門部）三君の訣別の辞に引続き出勤学徒を代表し大辻敬信（学部）桜部健（予科）二村思郎（専門部）三君の凛たる決意の言葉あり感激裡に同三時過ぎ閉式した

なほ京大では学徒部隊出発に当り京都駅頭で壮行式を挙行、羽田総長病氣引籠りのため渡辺法学、谷口経済学落合文学の各学部長から激励の言葉を饒けることになった

49 張切つて現地へ 京大、三高の学徒出勤

一九四四年五月二一日（朝刊）

“残留学徒また戦へり”工場へ、工場へ……戦野に通ずる勤労の大道を、出陣譜高らかに必勝の鼓動を伝えて学徒は征く――

京大第一陣法、経、文各学部二回生は廿日午前八時廿二分京都駅発で勇躍愛知県下へ向つたが、この朝脚絆姿も凛々しく胸間に氏名標識を附した出勤学徒は法学部加藤助教授、経済学部堀尾助教授、文学部遠藤助教授の指揮下に駅頭に

集結、渡辺法学部長は感激裡に壮行の辞を饒け、真情籠る師の言葉は学徒の多感な情熱をゆすぶり倒るるとも断じて戦ひ抜き、戦野の学友に応へんの決意を固めた、かくて駅頭を埋める教授、学生主事、残留の三、一回生ら多数の激励に送られ「頑張つて来ます」の力強い声を残し一路現地へ向つた、なほ出陣学徒のなかに交る法学部二回生馬場亀二君は陸軍中尉で支那事変に出征、赫々たる武勲を樹て左足切断の戦傷を負ひ、帰還した名誉の傷痍軍人であるが、不自由な身ながら闘志已み難く

「自分にも適した作業がある筈だ、是非参加させて下さい」

と進んで志願、茲に戦列に加はる事になつたもので義足をつけた姿に秘めた満々たる闘魂は学徒部隊の士気を弥が上にも昂ぶらせた

またこの日三高の文、理両科三年生全員が出動、午前九時大城学生主事に引率され大阪〇〇工場へ向つたが八月末まで敢闘する

50 京大 緑の芝生も決戦農場に

一九四四年五月二二日（朝刊）

時計台下に美しく敷詰められた緑の絨氈も増産の鉢によつて逞ましい黒肌に衣替する象牙の塔の決戦版——寸土も剩さず増産に役立たさうと京大では既報の通り構内空閑地三千坪の利用に乗り出し、既に経済学部は谷口学部長の陣頭指揮宜しく、テニスコートを見事な決戦農場に衣替させたほか構内の芝生といふ芝生は甘藷、里芋、大豆、そば、ヒマ、南瓜など多彩な葉蔓が我物顔に伸び誇つてゐるが、最後の本部玄関前の芝生もお仲間入りして廿一朝来、本部庶務課や総長秘書室の婦人部隊を狩り出して鉢入、耕土、播種、施肥など開墾作業を開始、嬉しい増産の豆を掌に作りつつ玉なす熱汗を沃土に叩き込み、日曜の一日を勤労の喜びに浸つた

51 大陸の増産戦へ京大生出陣

一九四四年五月二五日（朝刊）

学徒通年動員の一環として近く大陸の増産戦線へ京大生が出動する——

法経文三学部三回生を愛知県下の工廠へ送り込んだ京大では更に第二陣として、蒙疆の炭田地質調査のため理学部地質鉱物学科二回生が蒙疆大同へ出動、九月上旬まで現地で活躍することになった、出発日割は教錬や授業と睨み合せて決定するが大体六月一日頃となる模様、なほ引率教官は理学部松下進教授に内定してゐる

また農学部林学科各回生は製材作業のため六月上旬から向ふ三ヶ月間、府下北桑田郡京大芦生演習林へ出動するほか、農学科農林経済学科二回生は食糧増産部隊幹部としての予備訓練を受けるため廿八日群馬県へ赴く

52 統後護る学生隣組 全京大の残留学徒で

一九四四年五月二七日（朝刊）

学徒にとつて母校は第二の望郷である、学園から戦線に、増産陣に征で立つた出陣学徒達が求めてゐる心の糧は懐かしい郷土の香りであるが、征く者と残る者との魂を結ぶ楔として注目されてゐるものに京大の学生隣組がある多数の学徒を送り出した後の学園の護りを強化するためと、決戦下皇国学徒として相應しい学生生活を営み、心身の自主的陶冶を図らうと、既報医学部学生が自主的に結成した下宿先地域別による学生隣組は、各隣組との緊密な連絡を保ちつつ勉学や勤労、防空訓練などに積極的な活動を展開、その成果にみるべきものがあるが、学徒通年動員に伴ひ隣組の役割も加重されたので、この際組織網を拡充強化して残留学徒を一九とする学生隣組を新たに結成しやうといふ計画が進

められてゐる

この新組織では学内残留学徒は居住地域別に出陣学徒は出動先工場単位に結成、夫々再考学年生の中から組長を選び、学校報国隊と一聯の有機的活動を約束して随時常会を開いた上、活発な実践に移さうといふのであるが、工場の学生隣組は戦ふ学徒工員の元氣な姿や、貴重な体験を母校の隣組を通じて恩師や学友に伝えると共に、学園の隣組もまた母校便りを絶えず送り、征く者残る者互ひが励ましあひ齊しく皇国学徒の使命に生き抜かうとするもので、新しい活動の分野を拓くこの学生隣組の健全な発足が刮目して俟たれてゐる

53 京大の強歩大会

一九四四年五月二十九日（朝刊）

京大同学会では廿八日恒例の強歩大会を挙行、参加学徒は午後一時京大西部構内集合一乗寺道を経て鞍馬寺に至る十三・四キロの行程を制限時間三時間で踏破した

54 京大の學術調査隊十日に出発

一九四四年六月二日（朝刊）

一塊の鉱石も剩さず戦力化しやうと既報の如く地下鉱物資源緊急開発の命題に応へ全国帝大では近く理工科系教授学徒から成る學術調査隊を蒙疆に派遣眠る地下鉱脈に科学の巨手を差伸べる事になりその一環として京大でも理学部松下進教授、松田同学部講師、同学部鉱物地質学科一回生五名、二回生二名から成る隊員の顔触れを正式に決定したが来る十日出発二班に分れて向ふ三ヶ月間大

同、興和の両地区を踏査する

55 愛知へ出動早や二旬…… 京大法経文二回生の勤勞ぶりを聴く 腰すゑて 工員第一課気魄も充溢、尊敬の的

一九四四年六月一三日（朝刊）

学徒出陣の歌に送られ、勇躍愛知県下工場へ京大法経文二回生学徒が出動してからはや二旬日……教へ子達を現地に慰問激励した京大渡辺法学、谷口経済学両学部長の一行は十二日帰学したが、渡辺法学部長は戦ふ学徒の姿を次の如く語つた

▽：僕の口から話すのも変だが学徒工員の中でも京大生の評判が頗る良く、工場の総務部長にもお眼にかかつたが、特に京大生の気魄は全工員の士気を鼓舞してゐると聞かされ、面映ゆく思つた、これはあの工場が国営であり民間工場に働いてゐる学徒と異り、自分たちは直接に国家的な仕事に携つてゐるのだといふ誇りと強い責任観が学徒達の頭に自らはつきりとした勤勞理念を植ゑ附けてゐるのではなからうか、それに班長を勤めてゐる学徒の素質効率を高める一要素となつてゐるやうである、

▽：工廠の話では学徒はやはり普通の工員に較べて教養と知性の点から作業の熟練が早いやうである、学徒の日課は朝六時寄宿舎を出て七時から夕方の五時まで作業、六時に寄宿舎へ帰り読書などの自由時間に充てられてゐるが、全て軍隊式で規律正しい工員生活を営み、極めて少数の病人を除いて全般的には体力が眼立つて上昇してゐるのは注目された、また学徒たちは来年三月の進級までは頑張るのだと皆腰を据ゑてみっちり工員第一課に打込み、作業振りも実に真面目にやつて呉れてゐるのに安心して帰つて来たわけである、工場見学後寄宿舎で久し振りに教へ子たちと卓を囲んで会食し一時間半ほど話し合つたが、

学徒たちの率直な希望としては自分達に与へられた仕事は楽過ぎる、どんなに辛くても良いから適材適所に配置してもつと高度の材料なり仕事を与へて指導して欲しい事、それに作業開始前に行はれる朝礼などの精神的な時間に実際の作業時間が喰はれる事が惜しいといふやうな事を洩らしてゐたが、これも工場側の都合もある事であらうから諸君は飽くまで庶工員の気持になり切つて工場の空気に染る事が大切だと訓して置いた

▽…なほ寄宿舎を学問的雰囲気なものにし学徒としての教養を指導するために現在各学部附属教官数を増員したいと考へてゐる、また勤労報償金や食券、学徒工員の異動など会計的な仕事も追々伴つてゐるので事務職員の見地派遣も必要である、学徒達が求めてゐる知識慾を幾分でも満足させてやるために差当り本学図書館から研究書や綜合雑誌を送つてやりたいと考へてゐるが、今後寄宿舎内で教官の指導で座談会や研究討論会などをやるのも学問的雰囲気を失はれない上に良い事だと思ふ

▽…次に学徒達の求めてゐるのは懐かしい母校の消息、郷土の香りである、今後教官が所用で東上の際は努めて工場に立寄り学徒を慰問激励する事に努める積りであるし、また京都の新聞を送つてやれば喜ぶ事であらう、なほ法学部二回生馬場亀二君は陸軍中尉で然も傷痍の身で工場入りを志願し、毎日自転車で通勤、精密機械と四つに取組んでゐるその敢闘精神は全工員の亀鑑となつてゐるのはこれぞ戦時学徒の眞の姿だと感激させられた事である

56 「出陣図」に我征く日の決意 園公在りし日 も偲ぶ京大の記念式

一九四四年六月一九日（朝刊）

決戦下に迎へた京大創立第四十七回記念式は十八日午前九時半から青葉薫る時計台下講堂で全学教職員学徒並に名誉教授参列裡に意義深く挙行された、この

日開式に先立ち八時四十分から総長室で勤続卅年同廿年の職員表彰式が行はれ、ついで経済学部教授故八木芳之助博士に対する文部大臣の表彰状伝達式が行はれ、総長から嗣子芳郎氏に表彰状を授与終つて記念式に移り、国民儀礼の後総長登壇、過去一ケ年間の足跡を顧みて激しく遷り変る国内情勢を指摘して皇国学徒の新たな決意を促し、ひいて今回住友家から「清風荘」の寄贈を受けた旨を正式に発表、公の遺志に応へてこれを京大学徒の静修道場たらしめたいと語つて式辞とし、終つて学生代表医学部四回生大場一誠君は決戦下に処する学徒の決意を力強く披瀝、ついで天野貞祐教授は建学四十七星霜の輝かしい歴史と伝統を讀へた後、自己の学生時代から今日に至る日本の思想の動きが京大建学以来伝襲し來つた哲学思想と奇しくも暗合してゐると述べ、決戦下学生生活の在り方を示して京大今昔談とし、最後に学歌斉唱並に総長の発声で聖寿万歳、天野教授の発声で京大万歳を斉唱して閉式、引続き「学徒出陣の図」除幕式が光田学生主事の司式で行はれ、海ゆかばの莊重な樂の音と共に学生代表医学部四回生林君の手で意義深く除幕、総長の挨拶並に制作者に対する謝辞、製作者須田国太郎画伯の答礼あり、全員の拍手裡に閉式したが、講堂を圧する百号の大作に見入る学徒達は学徒征く日の凜たる雄姿をまざまざと偲び、われらまた先輩に続かんの決意を燃えたせた

なほ同画の複製は全学に頒布すると共に前線の出陣学徒の慰問用として発送することになった、なほ午後は今回住友家から京大に寄贈された陶庵公別邸「清風荘」の学内披露会が開かれ玄関に飾られた公が京大図書館に寄蔵の「静修館」の扁額、また数奇を凝らした居室、風雅な茶室、林泉の妙を配つた庭園、さては公の遺品、遺墨をはじめ、徳大寺公在世当時の京都と旧居の見取図、公と故内藤湖南博士との交遊記録文献等邸内の出陳品に参観の総長以下、名誉教授、教授、助教授らは在りし日の公を偲んだ

57 教練精神こそ戦陣訓だ 京大の査閲に専田大佐の講評

一九四四年六月二三日（朝刊）

本年度京大並に附属医専最高学年教練査閲は去る廿日京都師団山県少佐査閲官となり京都練兵場で実施、中隊密集教練、各箇教練、戦場運動、銃剣術、分小隊戦闘教練等各科目に亘り日頃錬磨の敢闘精神を遺憾なく發揮、優秀な成績を収めて終了したが、同学陸軍軍事教官専田大佐は廿二日教官室で次の如く注目すべき談話を発表、血戦下に処する学徒の重大決意を要望した

本年度最高学年教練査閲に当つては終始受閲態度に真剣味が溢れ、技術、精神共に向上の跡が著しいものがあつた、技術的に細い所はともかく、学徒等の旺盛な責任感と不屈の敢闘精神は平素の教練を通じてよく認められるが、今次の査閲に際しても遺憾なく真価を發揮し、査閲官閣下の御講評にもある如く全体の成績としては非常に良かった、この予期以上の成果は、乾坤一擲の重大段階に突入した現下の戦局に対する学徒等の異常な決意を端的に反映したものと思はれる、査閲は午後一時から六時迄だったが準備の關係で集合から解散まで前後十二時間に及んだ併し全員の士気は頗る軒昂で、特に法文系残留学徒の中には体力的に稍劣つた者や、病人もあつたが最後までよく頑張り通した敢闘精神は天晴れであつた、学徒等は査閲を終つて異口同音に樂でしつてをうてをつたが、それだけ教練が身についてきたのである、茲に学徒諸君に望む事は戦場、戦場を問はず、平素の教練精神を戦陣訓とせよといふ一点に尽きる、勤勞動員に当つても工場や戦場における態度起居、動作凡ては教練精神が基盤となる、あくまで教練精神を戦場に生かし、生産戦に挺身する気構へを失はぬ事である、教練成果を挙げる事は、延いては勤勞効率をも高める事になるので教練に一段の努力を払ふと共に、今後も出来るだけ勤勞出勤先における学徒の生活態度を視察したいと考へてゐる、査閲は終つた、しかし召される日まで寸刻たりとも心のゆるみがあつてはならぬ、通年勤勞動員や短期勤勞動員計画と睨み合せて

卒業見込の九月まで最高学年教練を続行し、最後の仕上げをやる積りである

58 京大生の海洋航空訓練

一九四四年六月二八日（朝刊）

京大同学会文化部では廿八日午後六時から楽友会館で源講師の日本美術史講座を開く、また同海洋部では七月六日から八日まで〇〇海軍航空隊で海洋航空訓練を実施する

59 貯水池に京大学徒の敢闘

一九四四年七月二日（朝刊）

空襲に備へて鉄桶の防空陣を布く学校報国隊京都都地方部傘下の各大学高専は連日市内の分担箇所にて学徒を動員して貯水池を築造中であるが京大でも愈々一日から残留学徒全員を動員することになり第一陣として経、医の両学部各回生が市内数ヶ所に出動、教授助教授の陣頭指揮で終日敢闘した、なほ経、医の各回生は五日まで作業を続行、引続き六日から向ふ五日間を第二陣、十一日から五日間を第三陣とし法、理、工、農各学部が交代で出動する

60 定員に満たぬ学科は第二次出願で 筆記試験無し京大願書締切

一九四四年七月三日（朝刊）

筆記試験全廃の本年度京大入試は卅日入学願書を締切つたが、高校側の受験者

成績調査書の作成が遅れたため願書の出足が鈍く、医学部薬学科をはじめ定員に満たない学科もあり、これらは欠員数を学科別に発表して第二次出願させ、その第一志望につき入学者を決定することになるが右について渡辺法学部長は語る

本年度入試は出身学校長の調査書と従来の実績を斟酌して入学者を選抜し、筆記試験は行はないといふ文部当局の方針に即して実施する事になったが調査書とは中等学校入学考査における内申書と同じ主旨のもので生徒の人物、学業、身体に関する調査、学校長の所見、勤労働員中の成績などを記載したもの、また入学者の実績を斟酌するといふのは、今までの入学系統を重視するといふ意味のもので高校と大学との歴史的なつながりと地域的の関係をいふのである、入学者の決定は学内詮衡により行ひ、今月下旬に入学決定者の発表をみる予定であるが、定員に満たない学科については欠員数を学部学科別に正式に発表して第二次詮衡を行ふ事になる、なほ入学の決定についてはまだ日もある事だから、全学科の正確な志願者数が判つた上で教授会にかけ調査書の審査、各学校の実績の比率算定、地域主義などの角度から睨み合せて慎重に行ひたい

61 京大生の進軍

一九四四年七月八日（朝刊）

防空と増産の二面作戦へ学徒の出陣—京大では既報全学部の各回生が目下交替で学内をはじめ市内の貯水池築造作業に、二回生は愛知県下の工場にそれぞれ出動中であるが、更に法経文各学部三回生が通年動員で十日から向ふ一箇月間府下某工場へ出動することになった

62 増産と防疫戦線へ 京大の技術系学徒を動員して

一九四四年七月一三日（朝刊）

増産と防疫戦線へ技術系学徒を動員する京大の勤労夏の陣—

京大では医学部本年度卒業予定者の中軍委託生並に附属医院勤務の学生以外の学外就職内定の者を、本月中旬から九月末まで勤労働員することになり、近く大蔵省専売局診療所、運輸通信省鉄道病院、通信病院の三ヶ所に出動、特殊技能を活かして医療報国に挺身する

なほ陸海軍委託学生は七月中旬から陸軍は陸軍軍医学校へ、海軍は海軍病院へ夫々配属され将来軍医としての實際教育を受けることになる

また農学部林学科二、三回生は七月から向ふ半ケ年（三回生は九月十五日まで）林産資源確保のため動員、三回生二名は帝室林野局名古屋及び木曽地方林野局へ、また三回生十二名二回生廿二名は大阪管林局へ夫々出動と決定、造林利用、測樹、森林土木作業、製炭の實際指導、流木の材積調査に当る

なほ農林化学科の動員要綱も近く文部省の指示を待つて決定する筈

63 大学院などの京大割当決る

一九四四年七月一三日（朝刊）

昨年から実施をみた新制大学院、研究科特別研究生の本年度割当方針並に人選方法は文部省の詮衡会でこのほど内定をみたが、京大の割当は総数五二名で、内訳は医七、工二三、理一二、農一〇となつてゐるが、本年は法経文の文科系には割当を行はず、刻下の緊急部門たる理工農の理科系に重点が置かれ、また医に対しては軍委託生がある関係上、昨年に較べて全国的にみて定員が三割方減じてゐるのが注目される

これは特に入営延期などの特典が附与されてゐるため緊要な学部に限定して最少限に研究生を限定その効率化を期したことによるものである

64 京大で特別警備隊を結成

一九四四年八月八日（朝刊）

空襲下学園の護りを更に強化するため京大ではこんど教職員生徒から成る特別警備隊を結成することになった

これは警報発令下の出動は勿論、準備管制下でも各学部教室単位に常備させるもので、学園近在に居住する者を以て編成、下令と共に十分間以内に夫々の部署配置を完了するやう機動性をもたした組織が特徴である、なほこのほか教職員の当直員数も〇〇名に増員、本部と各学部間の連絡活動に万全を期するなど鉄桶の防空陣を布くことになった

65 象牙の塔を出で工場で技術指導 羽田総長陣頭に京大五教授進駐

一九四四年八月二四日（朝刊）

一機でも一艦でもといふ言葉は国民の脳裡に強く焼きつけられ、本土を戦場と化しつつある現在では総ての力が挙げて兵器の生産に向けられつつあるが、この道こそ正に勝利への大道であり、宗教家も芸術家も学徒も悉くが兵器生産戦線に進出してゐる今日、京大工学部から五教授が羽田総長とともに工場に出張、技術の面に現はれた隘路の打開に身を以て当ることとなり、廿三日朝羽田京大総長、鳥養、西村、西原、佐々木、長尾の五教授は、三菱京都工場に出張、李家所長以下技術関係者と懇談の末、工場の現場に立つて科学者以外には発見

することの出来ない技術面の隘路を学理的に打開すべく、終日頑張り通して執り上げられた数種の課題を中心に科学陣の最前線戦闘が行はれた

京大工学部創始以来最初の企てである教授連の工場進出についてはさきの京都府軍需生産増強本部委員長で、李家三菱京都工場長が行つた発言に対して、増強本部が建設的意見として採上げ、京大羽田総長に申入れを行つたところ京大当局としても早くからこの問題に関心をもつてゐたので工場関係者の希望に応へることとなり羽田総長が先づ陣頭に立つて工場進出の号令を下すに至つたもので、科学者が工場で果す役割こそは大きなものがあり、各工場でも第一回のこの工場進出に多大の期待をかけてゐる

羽田京大総長談 兵器生産効率を更に飛躍させる上に大学の基礎的な研究と工場の実際的な技術とを一聯の紐帯に結びつけねばならぬことを痛感してゐた際、偶々三菱京都工場の方から生産現場の技術面をみて欲しいとの申出があつたので大学としても学術的な立場から氣付いた点を率直に御注意申し上げ更に積極的に協力して些かなりとも生産増強の上に寄与するところあればと思ひ、その方面を専門的に研究してをられる自然科学の先生方と共に御案内を乞うたわけであるがこれも一応實際面をみせて貰つたといふ程度のものであるから今のところ具体的にあだこうだと意見を申上げる迄に至つてをらぬ今後とも屢々お邪魔し検討してみた上で相協力して生産増強隘路打開に前進したい

66 大詔奉戴 いざ一億総武装 四 挙げて玉碎の秋

一九四四年八月二八日（朝刊）

道義が人間生活に不可欠のものであることはいふまでもない、この道義は悲しいかな日を逐つて廢頽してゆく有様である。国家の浮沈を目前に控へ一運托生の覚悟を以て戦に入つた現在ほど、道義の痛切に要望される時はないにも拘

らず反対に道義は地を払ひむしろ地の底に潜り込まんとしてゐる。

総力戦に統制を必要とするが故に、国民は官の命を奉じて翼々として生活しゆく際、すべてのものは戦争に向けられ、軍需生産が第一に置かれてゐる現在人人は最も責任を痛感すべき筈である

衣食足つて礼節を知るといふ言葉は、恰も衣食足らざれば礼節なきが当然であるかの如くに考へる者がある。

滔々たるこの風潮を、若し氾濫するに委せておくならば、内より国を滅ぼすに到るであらう

繰り返していふが大東亜戦争は民族興亡の岐路に立つ大戦争である。国民は死の苦しみをすべきが当然であり、楽に戦つてゆかれる筈がない。この苦しみを甘受する覚悟がなければこの戦は無意味である。バドリオの裏切といひ、七月廿日のヒットラー暗殺陰謀といひ、その因て来るところは、すべてこの戦が民族死活の戦であるといふ覚悟を忘失したところにある。更にそのより深き根源は国民の中に戦争より起る生活苦を乗りきりえぬ者の存在するところにある。

第一次欧州戦争の後にドイツの参謀総長になつたゼークトは「ドイツは前線において敗れたのでなく、銃後から敗れた」と述べてゐる。銃後の厭戦思想が前線にまで波及していつたのである。戒心すべき言である。

こんな考へを心の一隅に懐くものが出てくるならば、それはバドリオ的亡国の黴菌が発生したものである。由々しい大事である。

イタリアのエチオピア遠征軍は降服してゐる。だから銃後の国民が一命の安泰を望むことはむしろ当然だといへるかもしれない。しかし皇軍には玉碎あるのみである。帝国の銃後においては、生命だけは助からうなどといふそんな不心得な考へをもつものは一人もないと信ずる。靖国の英霊だけが、護国の花と散るのではない。国民ごとくが護国の神となつて玉碎する一途あるのみである。それが今度の戦争なのである。かかる生死巖頭の戦においてこそ無我報国の道義が最も必要なことなのである。社会の各層における道義の頽れゆくこ

とは、この戦争を十分に身を以て味つてゐないからではないか。

道義の廃頽は戦争の真の意義を体得せざるに由来するとともに、この戦争が隠忍に隠忍を重ねた結果なることを想はざるためである。実に興廃を賭ける戦なるを三思せよ。

相手が容易ならざる大敵なることは、初めから覚悟して乗り出した戦ではないか。これを思へば戦の酷しき姿をほんたうに知らしめても、国民はたじろぐ筈はない。そんなことに辟易する日本国民ではない筈だ。むしろ真相を率直に知らせなければ反つて国民を安易な生活に陥れ酷しき現実が眼前に展開すれば意気を沮喪せしめる惧れさへある。

我々は重ねて大詔を拝読してあの日の感激を胸に浮べて、あらゆる苦難を踏破し一死以て君国に報すべきである。決死報国の精神こそ聖勅に応へまつる唯一の日本臣民道である。国民一億が総武装して決死事に当るの時は来た。宣戦の大詔を頭に戴き胸に秘めて戦場に進まう。(完)

京大教授文学博士 原随園

67 けふ京大卒業式 饒けに籠る恩師の温情

一九四四年九月二日(朝刊)

既に行はれ、また行はれんとする大学高専の卒業式は単なる卒業式ではなく既報府立医大の如く卒業式中止といふ非常手段を執つた学園もあり、式は挙行しても法文系学徒の大半は昨冬仮卒業のまま出陣してゐるため、当日の出席卒業生は僅かに数名といふ大学もあり、きびしい戦争の息吹がひしひしと感じられる、国家育英制度創設、大学院改革、学徒戦時動員体制確立、徴兵適齢一年低下、科学研究緊急整備方策と矢継早に打たれた教育の決戦非常措置ではあるが戦局の推移は尚今後学園に如何なる形となつて現はれてくるか予断を許さな

い、この慌しい動向の真只中に挙行される今回の大学高専卒業式は、歴史的な大転換の嵐に立つ戦ふ学園の相貌の一断片であり、学徒また卒業の日こそ戦場へ馳せ参ずる栄えの出陣の首途として宿敵撃滅の決意新たなものがあらう、京大では卒業生の大半が入営団することになるのでけふの卒業式に当り羽田総長はこれら出陣学徒へ署名入りの国旗を餞けすることとなつてゐるが、最古参教授の天野貞祐文博は廿日午後六時半から法経第三教室で「回顧と展望」と題する卒業生送別記念講演を餞けした、なほ内地、朝鮮各地の重点工場其他に就職配置で出動してゐた理、工、農各学部第三回生はこのほど帰学、廿二日挙行の卒業式に臨み、卒業と同時に入隊延期者は入隊通知を受けたものから逐次入営団し、その他は就職決定先の出動工場に採用され科学戦士として御召の日まで生産陣に敢闘する、また医学部の陸海軍委託生、見習医官合格者は既に陸海の軍医学校で服務中なので卒業式に臨めない者への学士試験合格証書は父兄宛に伝達、また法経文各学部三回生の昨冬仮卒業の形式で出陣した学徒兵には本証書を父兄宛に伝達して第一線へ学園から餞けすることになった、光田京大学生課長代理は光栄ある学徒出陣の首途を寿ぎ健闘を祈つて左の如き訣別の辞を贈つた

諸君が今日の栄光を感じる時、十数年の蛰雪の功を積むを得た国恩の宏大さに思を致さば、夫々の進む道は自ら明かになるであらう、況んや決戦下の学問を行しつつ増産の第一線に挺身し今や自らの手になる機械を操つて敵撃滅の第一線に向はうとする、男子の本懐之に過ぎるものがあり得やうか、双手を挙げてその行を祝したい、唯戒むべきは血気である、物量を持つ敵に対して現在の我国は寸毫の物資をも有効に用ひなければならぬ、況んや多年育成を享けた諸君の学術と教養と更に旺盛な精神力とが自らによつて疎略に扱はれてならないことは云ふまでもない、男子一度生を享ければ自らなる死所があり、脈々たる皇国民の血脈は悠久の大義に生きるを訓へる、然もわれわれは眞の生が死よりも難い幾多の事例を教へられた、今こそ、知識人が身を以てその艱難を行する

の時である、銃執るも執らぬも皇国護持の熱意にかはるところはない、凡ゆる時と場所に身につけた学問を身を以て行する心構への中に遠い学問の道に不断の精進を続けられたい、しかも学徒として多年錬磨の成果を身を以て試みるの時は到つた、新卒業生諸君の奮闘を期待すると共にその自重を祈るや切なるものがある

68 下鴨神社で早朝の奉仕 惟神道体得に京大小牧教授

一九四四年一〇月六日（朝刊）

祭政一致先づ皇道精神を究めるには自らが神祇に奉仕し神苑の清浄な環境にあつて祈りつつ学ばねば……と大学教授の栄職にありながら毎朝未明から祭祀奉仕を続けつつある人がある

京都帝大文学部教授小牧実繁文学博士は曩の京都府主催神職講習会が京都国学院に開催された際、自から進んで講習を受け祭典奉仕の一切を修得後、これだけでは憚らずと西村府社寺課長、高橋祭務官に諮り、実地に神社奉仕がしたいとの申出に社寺課長、祭務官は社格といひ由緒ある武神を祀る官幣大社下賀茂神社（下鴨）を選んだ

博士は直ちに下賀茂神社に大関宮司をたづね、その日から神職と一緒に毎朝五時の皇軍必勝祈願祭に奉仕し、北白川小倉町の自宅から毎朝祭典のはじまる午前五時前に神社へ到着、神職と一緒に神殿の清掃作業に奉仕、祭典には神職とともに神前に額づきその熱心さには大関宮司も全く関心してゐるほどである、大関宮司は語る

博士の毎朝の奉仕には我々も全く感心させられてをります、かかる有識者が、かういふお心持ちになられたことは感謝の外ありません、次から次、博士に続くやうな人が出る時、はじめて神国日本の眞の姿が顕現されるのではないか

と思ひます

69 科学補助員を養成 京大でけふから願書受付

一九四四年一〇月一五日（朝刊）

科学研究者の手足となるべき補助技術員の緊急大量養成を目指し、既報の如く文部省では各官立大学専門学校研究所等に文部省科学研究補助技術員養成所を新設することになったが京大では「文部省科学研究補助技術員京都養成所」の名称で科学戦力増強の巨歩を踏み出すことになり、けふ十五日から願書を受付け、廿八日詮衡、卅一日から開校の運びとなつた、尚これが細目について文部省と打合せの為東上中の京大有浦庶務課長は十四日帰学、生徒募集要項を次の如く発表した

【学科】高電圧及び精密計器の二科目 【人員】各科五十名宛 【資格】男女中等学校卒業者又は最高学年在学者（四、五両学年生）民間会社工場委託生、（在学中の志願者については在学校卒業の便宜が与へられる）年齢及び住所の制限なし授業料不要、生徒に対し月額廿円の給費あり 【修業期限】各科六ヶ月 【願書受付】十月十五日より廿五日まで 【詮衡】十月廿八日学科試験並に口頭試験を行ふことあり（学科試験課目未定）

志望者は入学願書、履歴書、最終学校卒業証明書写、又は卒業見込書を京大本部庶務課宛提出のこと、本養成所卒業者は「軍能補助員」の名称が与へられ文部大臣の指定する大学及び研究所軍需会社等に就職義務がある

なほ詳細は京大本部庶務課に申込めば学則を呈す

70 京大挙げて出動 勤労働員に食糧増産に

一九四四年一〇月二三日（朝刊）

京大では新学年から学徒勤労働員を更に強化することになり、目下受入先と折衝を急いでゐるが、既に経、文二回生は府下某工廠へ明春一月十日まで、法二回生は通年動員で大阪造兵廠へ、三回生は豊川工廠で同じく通年動員で敢闘中、また附属医専一年生は廿二日から奈良県下へ出動、農繁期の援兵として向ふ八日間出動するほか、各学部一回生も国土防衛、食糧増産への短期動員が計画されている

一方理工系の三回生は各就職先と睨み合せて出動、軍委託生は軍工廠、軍医学校、軍病院等へ配属され、二回生は教室単位で各方面の事業場へ適正配置をみる筈で全学園を挙げて戦力増強に挺身することになった

71 京大医科生ら出動

一九四四年一〇月二九日（朝刊）

“一機でも多く”の前線の雄叫びに応へてさきに若き学徒の群列が生産陣営に馳せ参じてより早くもここに半歳、生産現場における幾多の隘路も灼熱の至誠と闘魂で克服して熱血の記録を刻みつつあるが、同時に勤労働員生徒の健康管理は重大問題化しつつある折からこんど京大医学部では“生産の増強は体力の増進から”と文部省の施策通牒にもとづいて勤労働員生徒の健康管理、事故防止に積極的に乗り出すことになり近く医学徒が各地の工場事業場へ出動の運びとなつた実施に当つては軍方面の委託、医学習得の年限、臨床実習などの実情を考慮して出動は高学年生は避け、かつ短期になるものとみられ、なほ細目に関しては文部省と協議中であるが医学徒の巡回検診は生産効率の上昇に寄与するものと

期待されてゐる

72 科目の一部停止 京大法経文三学部の前講座

一九四四年二月二日（朝刊）

戦局の要請にもとづいて打たれた徴兵猶予期の撤廃、適齢の引下げ、通年動員など決戦非常措置による講義時間の縮減に伴ひ、必然的に或る程度の学力低下は免れないので、京大法経文三学部ではかねてこれが防止策を練つてゐたが、このほど教授会で成案を得、新学期から新人生に対し重点講義を実施、短期間に実力を附与することになった

即ち法学部では牧法学部長時代に改革実施された学年制を本年度から廃して再び科目制に復帰、選択十八科目に合格しかつ三ヶ年在学したもの（認定も含む）に対し学士号を授与する▽次に法律学科と政治学科との区別を廃するほか、憲法行政法などの重点三十一科目を除く十五科目を一時停止し講座の再配列を行ひ、来年三月末までを三学期に分けて、各学期末に試験を施行する▽経済学部ではこれまで三ヶ年要した全課程を一ヶ年で修得させるやうこれも講座の重点再編を行ひ、来年三月まで各四週間毎に数科目の総合講義を実施、講義終了毎に試験を施行する▽文学部では一ヶ年分の講義を向ふ三ヶ月間で終了、専攻学科集中主義でゆく

以上の如く人文科学系生徒に対しては何時入団營、勤労働員があらうとも基礎学だけは身につけさせる敵前態勢を完了、十一月一日より実施の運びとなつた

73 特攻精神 対談① 京大教授原随園博士 本社高谷編輯局長 大君のため死ねる幸福三千年伝統の血進る

一九四四年二月一日（朝刊）

必死必中、悠久の大義の中に生きて莞爾として護国の神と散つた若松―特別攻撃隊の偉勲ほど一億の胸を衝いたものはない、その烈々たる姿こそ生きながら既に神であり、その高風は国こそ敬仰の中に燦として万世に薫る、まことに特攻精神こそ肇国以来脈脈として皇国に伝へられる日本精神の顕現であり、今こそ一億国民ごとくこの特攻精神を自らの中に呼び起して驕敵撃滅への誓ひを新にすべき秋である、烈々たる特攻精神を景仰して、京大教授文学博士原随園氏に本社高谷編輯局長と対談を乞ひ、ここに連載する―

高谷編輯局長 特攻隊は世界に比類のない日本精神を具現したるものと思ひます、実はあの事実が発表される際当局でもこれが指導は新聞社に委するから適当な方法を探れといはれたさうです、がそれを聴いてゐた新聞記者は非常に感激して直ぐに原稿を書くことも出来なかつた程といひます、今さら言ふまでもありませんが、日本人全部は特攻精神をもつてゐると思ひます、けれども我々の目前に特攻隊のあの事実が示されては日本国民として感激の頂点にあります、そこで特攻隊の精神を承りたいのであります

原随園博士 本心に真相をぶちまけてくれるといふ小磯内閣以来のあの声明、直接国民にぶつつかつて行くといふ遣り方は私達としては非常に望ましい事だと思ひますが、特攻隊に就ての報道を聴いた時に名状出来ない感じで一杯になりました、それを分析してみますとあの報道を聴いた時に日本の若い武士を喪つたといふ無限の痛ましきといふものを感じると共に、また非常に有難いといふ感じが自ら湧き上つてきました、それと同時に日本が勝つ確信が特攻隊の奮戦によつてついたやうに私は感じました、さうですね、いろいろの感じが報道を聴いた瞬間に涙と共に起つた、それと同時に我々は矢張りこれで行かねば

いかんといふ反省が起つてゐたと思ふですね、あの複雑な気持ちは恐らく日本国民の誰もが味つた気持ちではないか、恐らく緒戦に真珠湾の特殊潜航艇に感激したあの時以来の非常に感激に満ちた報道だと私は思ひます

高谷 日本独得の精神が凝つて特攻隊といふものを仕上げたものだらうと思ひますが、世界的に見て或は人類歴史始まつて以来の企てではないでせうか

原博士 絶対にないと思ひますね、戦争がある度に兵器といふものは非常な工夫を凝らし非常な発展を見て、何処まで新兵器が行くものだらうか、予想も出来ぬことだらうと思ひます

例へばドイツでは人間魚雷といふ新兵器が出来たと言はれてゐましても人間は帰つて来て爆弾だけが向ふへ突進して行く、そこに新兵器の誇りが見出されてゐる訳であるが、日本のは持つて行くその人そのものが一旦出たら帰らぬといふのであつて、斯ういふ兵器といふものは日本人でなければ編み出し得るものではない、そこに日本的な独自の精神が発露してゐるのではないかと私は思ふのですが――

どんな国でも勝利を得る国民は必ず必死となつて身命を捧げてゐる、身命を擲つて行くといふ精神は歴史を繙いても我が国ばかりでなしに、凡そ勝利を得た民族の中にはないではないのでありますけれども、それを単に平生の気持ちと同じやうな淡々とした気持ちで死に就くといふやうな精神は矢張り日本的な独自の精神のやうに私は考へるのであります……

高谷 この特攻精神といふものは三千年来日本人の血に脈々として伝はつてゐる訳ですが過去においてその精神の発露された事実を求めるならば楠公精神もさうだと思ひますが、それこそは特攻精神と相通するものがあるのではないでせうか

原博士 歴史的に培はれた大伴氏の

「大君の辺にこそ死なめ顧みはせじ」

の歌がそれに当嵌るのではないかと思ひます

この間私が海軍予備学生を書いた書物を一寸見たのですが、予備学生をどうして志願したかといふ感想文が出てをつた、その中に

「けふよりは顧みなくて 大君の醜の御楯と出でたつ我は」

といふ歌が殆んど全部に書いてあつた、それであの歌に非常に青年が共鳴してゐたといふことがいひ得られるのではないかと思ひます

つまり現在の特攻隊の精神といふものは結局我々祖先のもつてゐたその精神から流れを引いて来てをるやうに思はれる、つまり尽忠報国、我が 大君の御為に死し 大君の御為に生きるといふ精神が特攻隊の精神であり、これが所謂楠公精神に見出されるのではないかと思ひます、そこに谷暢夫特攻隊員のやうに若い人が

「日の本の空征く者の心なれ散るを惜しまぬ桜花こそ」

また

「御国の為に死ねる身の幸福を言ふを得ず」

といふ遺書を父母へ遺されてゐますが、この和歌の精神ともいふべきものは所謂わが尽忠報国の精神であり、日本肇国以来伝はつてゐる精神ではないかと思ふのです

谷飛曹長なんかの□――さういふことが本当に具体的な行動の規範として考へられたといふことは

「身を尽す機会ありともわれ七度生れ来りて撃ちてし止まむ」といふ歌があつたが此歌によつても判る、この「撃ちてし止まむ」といふ精神は日本の古来から伝はつてゐる精神であり、それを楠公が七生報国によつて具現された、さういふ精神が特攻隊の間に考へられ信ぜられてゐたといふことが痛感されます

これは独り敷島隊ばかりではない、富嶽隊の西尾常三郎隊長でありましたか、報道を見ますと非常に小楠公に景仰してをられた、小楠公の四条畷の死を詠つて書かれたといふことも報道に見えてをりますがこれらも矢張り日本古来の伝統の精神の発露とも言ふべきものではないか、斯ういふ精神は日本独得のもの

だらうと思ひます

74 特攻精神 対談② 京大教授原随園博士 本社高谷編輯局長 純忠「私が死ななければ」 若人の「必死」に皇国の勝利

一九四四年二月二日（朝刊）

高谷 特攻隊の隊員を見ると若い予科練出身者が多い、殆んど青年によつて網羅されてゐるやうであります、青年によつてこの精神が打ち樹てられるといふ事になります、青年が克く国体精神を護持して 大君のために生き 大君のために死して行くといふ氣持が青年の間に培はれたといふことは非常に日本として力強いことだと思ひます、つまり現在の青少年の氣持ちといふものはこれによつて相当強く引緊められてゐると思ひますが――

原博士 確かに山本元帥以来青年といふものが、勇氣を出して来たといふことがいはれるが全くその通りであります、實際大和隊に加つた植村真久少尉であります、あの人のお母さんであつたか、お父さんであつたか、

「さう急いで死ぬやうなことはないだらう」

といはれたさうですが植村少尉は

「私が死ななければ日本は勝てない」

といはれたといふ報道が出てをります、又阿部信弘少佐（二階級進級）がお父さんの阿部信行大将に出された手紙に矢張り

「今度の戦争は我々青年が死ななければ勝てぬ」

といふことを書かれたといふことを新聞で拝見したのであります、これが矢張り今の青少年がもつてゐる共通した信念であると申さなければならぬ

日本の将来をどうするかといふ共通した精神ぢやないかと私は考へるのであります――神風隊の報道の中には関行男中佐のお話も出てをつたと思ひますが

「日本人として長男に生れたからとて何故飛行隊に志願が出来ぬか」といつて志願されたさうであります、これなんでも矢つ張り自分の小事といふやうなことが又一家の家系がどうなるかといふ觀念を超えて 大君のために生き 大君のために死ぬといふ精神であつて、そのことが同時に日本の永遠に存続する所以であり、ひいては一家といふものを永遠なものたらしむる精神だといふ信念からだらうと私は思ふんであります

新聞報道に見る特攻隊員についてのどなたのお話を見てもみな非常に親孝行だつたといふことであります、殊に谷さんのお話でありましたか「最初にして最後の親孝行」といふやうな言葉があつたと思ひますが一身一家、その家自体が国家に繋つてゐる、皇國を護持するといふそのことが家を存続することである 大君に尽すことが親孝行であるといはれる、最初にして最後の親孝行をするのだ、出たらもう帰らぬ、それが親孝行になるといふ、これが皇國護持の精神といふものに繋つてゐると私は思ふのであります

また斯ういふ事も大変面白いと思つてゐますが――特攻隊の□掩隊の菅川飛行兵長でありますか敷島隊の片腕となつて顕彰されたものであります、特攻隊の意圖を達成さすため、これは何処までも護持していつて謂はば縁の下の力持ちといふ隠れた力を備へてゐるといふことは菅川兵長のことではつきりいへると思ひます、その際に何れも死を覚悟して皇國のために尽すといふ精神に變りはないが、客觀的に見ると直ちに敵の空母に体当りをするといふ華々しさに引替へて、それを掩護して行くといふ陰の仕事をする人が矢張り黙々としてやつて頂けるといふことは、純真なる一死滅敵の大精神に向つて行く信念が力強く培はれてゐると思ひます

よく海軍諸学校の棒倒しについて聞くが、これは青少年殊に予科練等の学校で培はれて行く精神を具體的に示した競技であるやうに私は思ふのであります、棒倒しを實際見たことはないが予備学生の敢闘といふところを見ますと遮二無二敵側の棒を取つかまへんとするのであるが、つかまへたいといふ心を抑へ

ながら或る場合には見方の同志が早く棒を掴むことが出来るやうに或る時はその踏台になり一刻も早く目的地に驀進するといふ使命がこの競技において現はれてゐるといふことを讀んだのであります、このことを菅川兵長のことを承る時に思つたのでありますが、そこには何等私心といふものはない、只一途に相協力して最大の目的に向つて突進するといふこの精神が現はれる、さういふことを鍛へるのが棒倒しといふ競技ではないかと思ひます、さういふやうにして鍛へられた青少年は全く頭が下ると思ふのでございます

75 勇む理工系学徒 法文系学徒に続き征く日の感激

一九四五年二月九日(朝刊)

理工系学徒出陣—今回の入営延期制解除で法文科系学徒に踵を接し学窓から戦場へ征でたつこととなつたが熾烈な戦局の変貌とともに極度に縮減された入営延期解止の発表に京の学徒の血は燃えた、八日朝京大はじめ京の各学園では大詔奉戴式の後この至上命令が報ぜられたが、新しく国家の要請によつて四月一日をもつて勇躍凶敵撃滅の第一線任務につく適齡学徒は予てからけふの日を待ち焦れてゐたのだ、いま通年動員で生産陣にまた海軍予備学生生徒となり、明日の学徒たちは陸軍特別甲種幹部候補生または海軍予備学生生徒となり、明日の下級幹部として銃剣を執るが、これら理工系学徒の出陣で皇軍の陣容はさらに儼然となり新らしい力に対する一億の期待と信頼は無限である、陽春四月、制服をぬぎペンを捨て桜とともに咲く若武者のひとりとして出陣する理工系学徒、京大西岡嘉雄君はその決意を力強くもかう語つた

「すぐに続くと出陣した法文科の学友に誓つた言葉を果せる日が来ましたが、出陣する今の心境は淡々たるものです、五尺の身も魂も国に捧げた大君の御ため、神州護持のため、死ぬ時の来たのを見つけたのみです、今日までわれわれ

が心血そそいだ研究も、日夜闘つた生産も残る学友たちが引継ぎ、きつとわれわれの分までも引受けてくれると信じ安んじて戦場に征きます」

76 京大で学徒総躍起大会開く 政府は我等をして 即、最難の部署へ 決議文を首相へ提出

一九四五年三月二五日(朝刊)

皇国の危機に直面して国民学校初等科を除き全学校の授業は愈々中止されることとなつたが、この学園未曾有の処置に対して京都帝大に学ぶ学徒もこの施策に進んで即応、燃え上る憂国の至情をただ一路勝ち抜かんがため神州護持の使命に起るべく廿四日午後一時から法経第一教室に全学徒が集合、尊皇攘夷全学総躍起大会を開催した

若き血潮沸る学徒、学徒の顔は決意と感激に緊張して会場を圧する気魄はただこれ滅敵のため一切を捧げんの焰と燃えるばかり、發起人の開会の挨拶、経過説明あり、次いで憂国の情を盛る決議文を上程、熱誠迸る意見の交換あり検討の結果、全会一致で可決した、同決議文は近日中に代表者が携行小磯首相の許に提出するが、これが具体策に就いては近く代表学徒が協議する

決議文

今般政府は国民学校初等科を除く学園に対して向ふ一箇年間を限り学業停止を決定し学徒をして国土防衛と生産増強に挺身せしめんとする施策の発表を為したり是正に我等京都帝国大学全学生の鶴首待望したる処にして何ぞ吾に一箇年の時期を画さんや十年可なり、百年亦宜し、勝利を収むるの日まで我等全力を奮ひて醜敵撃滅に邁進せんのみ、先に「サイパン」「テニヤン」の失陥あり、今又硫黄島将兵の壮烈鬼神を哭かしむる最後の総攻撃の報に接す、驕敵は更に

勢に乘じ飛機を發して我が清澄の天空を擾亂し砲列を連ねて我が秋津洲を侵犯せんとす、而も内にありては聖戰完遂の体制未だ必ずしも十全なりといふべからず、嗚呼、我等此の秋にして尊皇殉国の大義に徹し蹶然起つて攘夷の戈を振はずして何時の日か君国に報ずるの機あらんや、政府は宜しく我等京都帝国大學生をして即刻最難の部署に就かしめよ、我等必ずや我等が若き力を凝結し心身の一切を捧げ以て皇恩に報い奉り神州護持の礎石たらん

右決議す

京都帝国大學生一同

77 育む、京の天才 中学校、国民校生に科学特種教育 願書受附は今月中に

一九四五年四月一八日（朝刊）

優秀な科学技術的天分を有する国民学校児童及び中学校生徒を選んで文部省が今回京都特別科学教育班を設け科学技術的特殊教育を施すことになった、このため十六日午後三時から京大薬友会館に班長京大理学部長駒井卓博士以下教育関係者廿余名が集り協議を遂げた、即ち中学校特別学級に入学せしむべき生徒は京都府を中心とした近接府県内の中学校在籍者中より、また国民学校特別学級に入学せしむべき児童は京都市を中心とした近接市町村の国民学校在籍者中より募集し、国民学校児童は京都師範学校男子部附属国民学校に、中学校生徒は京都府立一中内に特別学級を設けて教育する

募集は中等学校の一、二、三年生並に国民学校四、五、六年児童中より科学技術的天分ありと認め、学校長が推薦したなかから厳選するが、一学級の人数は中学校廿名乃至卅名以内、国民学校十五名乃至廿五名とし駒井班長のほか京大医学部教授岡省吾、京都府学務課長田村義雄、京都師範学校校長岡弥一郎、京一中隈部以忠の各氏始め関係者約卅余氏が講師となり、一定教授時間のほか個

人指導をも行つて将来京都帝大まで殆ど官費で進学せしめる計画である、採用試験は中等校が来月三、四、五の三日間、国民学校はその前後に実施される見込みで試験科目は筆記口答、心理考査とし願書は各学校長が内申をそへ一括、今月末日までに京大庶務課同班係に提出することとなつた

78 断じて勝抜くのだ 戦敗国ドイツの悲慘を見る

一九四五年五月一四日（朝刊）

新らしい世界建設のため相共に戦つた盟邦ドイツも遂に刀折れ矢尽きて敗れた、併し我が帝国は断乎戦ひ抜くのである、敵は更に物量を増し、戦意を駆立てて押寄せるであらう、されどわれに必勝不拔の信念のある限り戦ひの帰趨は明らかである、戦争は負けたと思ふ方が負けなのである負けてはならない、戦敗国が如何に惨めな如何に苦しいものであるか——第一次欧洲大戦後戦ひに敗れたドイツ国の実情を次の諸氏に聴き「我等断じて負けられぬ」の覚悟を固めやう、然も悠久幾千年神州の地を野獣の如き米英に踏ましてなるものか、我等断じて敵を撃滅するのみである

ナチス政権は僅か十年余 我が三千年の伝統と根本相違 中川京大助教授 京大経済学部中川与之助助教授は昭和六年から同八年に至る二年間をドイツに留学、この間満洲事変勃発と共に世界の戦雲愈々慌しくなるなかに第一次世界大戦に敗れたが、窮乏のさ中から漸くナチス政権の樹立によつて逞しく祖国復興の途についた状態を具さに視察し、更に我が国とドイツの国家組織とを各方面から比較検討し学界に多大の貢献を齎したのであるが、いま同助教授は敗戦国ドイツの模様を次のやうに語る

近代戦において一敗地にまみれた敗戦国が過酷な条件を甘受して如何に悲慘な運命を国民全体とともに歩まねばならないかを余りにもはつきりと我々に示さ

れたのである、ドイツは既に第一次大戦の失陥で僅か十万の兵力を残して一切の軍備を撤廃させられた、然も聯合國に対する莫大な賠償金の為に国内は疲弊困憊の極に達し、更に生産力の不振は六百万乃至七百万といふ失業者の続出となり、老幼者はもとより血氣の青壯年でも強度の肉体労働能力のない者は街や公園に乞食となつて彷徨し、強盜奪掠、売娼婦など暗黒ドイツの様相は正に再起不能の状態であつた、だが幸にもこの希望を失つた国からヒットラー総統が現れこの失業者の大群を救済せんものと先づ土木事業に着手して祖国復興に全力を尽し遂にナチス政權の樹立をみドイツ全体主義國家を形成したのであるが総統が政權を獲つて茲に十年余第二次大戦で再び悲運のどん底に叩き落された、累次に亘つて協議された敵國等の対独処理案は最早一片の同情とでもなくドイツ民族の滅亡とさへも考へられる程である、この大戦では悲惨な中にもまだ僅かの兵力を残し得たし資源、領土の保全も許されたが今度は恐らく軍備の完全なる撤廃と共に國富、資源は勿論、領土一切を歐洲戰勝國である英、米、ソその他反枢軸國が支配し形式上、共同管理として独逸の監視役となり、實質においてこれら三国に依り資本主義的帝國主義と共產主義のもとに分離されることになるのではなからうか、そして眞の独逸全体主義國家はこれで終末を告げ永遠に地球上から葬られるだらう、仮令新しく再び起上つたとしても、それは恐らく今迄と異つたものであるに違ひない、茲で我々はドイツが何故斯くも脆く敗れたのかを真剣に検討してみる必要がある、その一つはナチス政權が戦ふまでに自國はもとより歐洲國家に対して本當に心服せしめるだけの原理が確立されてゐなかつたことで、これはヒットラー総統が政權をとつて十年余では眞に止むを得ないことと思はれる、この点日本は歴史始まつて三千年、神代から數へて幾万年といふ貴い伝統の力を持つてその上臣民拳つて天皇に帰一し奉る惟神道を貫く我々は如何に有難く万邦に雄飛してゐるかを再思反省すべきである、ヒットラー総統がどんなに深く我が國体を研究し全体主義を大施するも日本の如き特攻隊精神を把握し得なかつたのは此歴史と伝統の差異であら

う、日本精神はドイツのそれに対し結局比較にはならなかつたのである、ナチ政權が歐洲で歡迎されなかつたといふのは結局唯物的思想で出発したからであり、歐洲戰で「喰ふか喰はれるか」といふやうな言葉は日本精神では理解に苦しみ、我々は八紘一字といふ大理想に基きこの大精神にまつるはぬ者をまつるはしめるために戰つてゐる、これが所謂「生存の爲の戦ひ」と「道義の爲の戦ひ」との相違なのである、従つて我々はドイツの失陥如何に拘らず断じて戦ひ抜くのである、若し我々が戦ひ半ばにして止めんか、東亞諸民族を奴隷視、家畜視してゐる彼らの蹂躪はドイツ以上の悲惨と辛酸を嘗めねばならない、我々の運命は既に「坐して死滅するか起つて戦ふか」の二つの方法しか残されてはゐない、我々は東亞諸民族の幸福を冀ひ私心を去つて只管戦ひ抜くのみである困苦欠乏に耐へた者のみに勝利の栄光は輝く 須田国太郎画伯

第一次歐洲大戦終了直後の大正八年から五年間在歐してその間二回にわたり入独戰敗國ドイツの真相を具に見聞してきた洋画家須田国太郎氏は戦争には絶対敗けられぬと戰敗國の惨めさを次ぎのやうに語つた

停戰直後の大正九年春と十年の初め頃の二回ドイツの各地を歩いて廻つた、第一次大戦におけるドイツは戦争に勝つて勝負に敗けたといふ形であつたので、國民の生活上の窮乏状態は勝者であるフランスと余り変りはなかつた、併し敗者であるといふ精神的打撃は大きく、国内何処へ行つても憂鬱悲惨な暗い影が横たはりそれがひしひしと私の胸に迫つた、小学校の児童達は素足で登校し、衣服はつぎだらけで、シャツは紙製のものが売られてゐた、食料は馬鈴薯とパンが切符制になつてゐた、砂糖は勿論なく肉は一週何グラムといふ風であつた、ザール地方へ行つたがケルンの官庁等であの氣位の高いドイツ人が米英人の監視下に小さくなつてゐる姿は哀れなものであつた、また街には私娼が氾濫して盛んに外國人に媚を売り、娘達が英米兵の相手になつてゐる姿を見た、またある処では聯合軍が戦車や機銃を押し並べてそれに対して嘲笑したとかいつて民衆に発砲し多數のドイツ人を射殺したこともあつた、二度目に行つた時にはマ

ルクの暴落で一寸した物を買つてもその釣銭が両方のポケットに入り切らぬ程で紙幣は全く紙屑のやうな価値しかもたず、一時間前と後で物の値段が違つた程である、ベルリン博物館にあつた世界的に有名なベルギーガン市の祭壇画ヴァンダイクの一部分が取り上げられたり、その他著名な美術品が持ち去られ縁だけが空しく壁面に残つてゐるのを見た、国内に一步も敵を入れずして敗れた当時でさへこれである、今次の如く徹底抗戦を叫んで首都まで灰燼と化し戦車にふみにぢられて敗れ、しかも敵国は鉄の統制をもつてのぞむと苛酷なる制裁を加へることを公言してゐるのであるから、戦敗国ドイツの今後が如何に悲惨なものであるかは想像に余りがある、この戦敗国の惨めさを思つたならば如何に苦しい生活でも耐へられる筈だ、また困苦欠乏に耐へた者のみに勝利の栄光は輝くのだ、われ等は石に嚙りついても勝ち抜かねばならない

79 晴れの首途に忠孝一致の感懐 第二七生隊 千原少尉 京大出身

一九四五年六月三日(朝刊)

忠烈燦たる偉勲を四海に輝かした我が神風特別攻撃隊の南西諸島出撃悠久の大義に殉じた第二七生隊千原達郎少尉は府立舞鶴一中出身であり、同神鷲は加佐郡岡田上村大□千原みねさん(五〇)の一人息子幼い時から塾に従事するみねさんの手一つで育てられ、舞鶴一中十三回卒業(昭和十四年)であるが一年の時から五年まで首席で級長をつとめ卒業の時は知事賞を獲得八高を経て京大法学部を卒へた法学士で忍耐力強く且つ豪毅果斷、真面目であらゆる点に勝れた青年であつた

在校中は柔道の選手を勤め庭球部の首将を兼ね舞中の庭球黄金時代を築いた一人である

舞鶴一中はこれで馬場、谷、矢野、千原と今回四人の神鷲を出した訳である、

村長岩田巽氏、助役佐藤誠太両氏は
我が村から初めて特攻隊員を出したことは村の誇りであると感激してゐるところです

また一中谷口教頭、松谷教諭は

本校から相次いで神鷲を出した訳で、全校益々決意を固めて聖戦完遂に勇奮してゐる次第です千原君は優秀な青年で庭球部の首将として体育方面にも頗る努力した模範生でした、同君等の冥福を祈り愈々全校をあげてこの先輩諸勇士に続く決意をしてゐます、なほ出発に際して私等を尋ねて首途の感懐と題して書き残した愛国のうたは面目躍如たるものが窺はれます
醜の身を国まもる盾とのりたまふ大御心を尊きぞかも
三度迎ふ師走八日は風荒れて天つ神々猛りほゆかも
大君に仕へまつれば母そはの母につくすと一つの我は

80 京大学徒隊も今月中に結成

一九四五年六月二六日(朝刊)

京大の全学徒と教授を打つて一丸とする京都帝大学徒隊も本月中に結成されることとなつたが、これには残留学徒はもちろんいま動員中の動員学徒もすべて参加、羽田総長の指揮下防衛に増産に挺身する